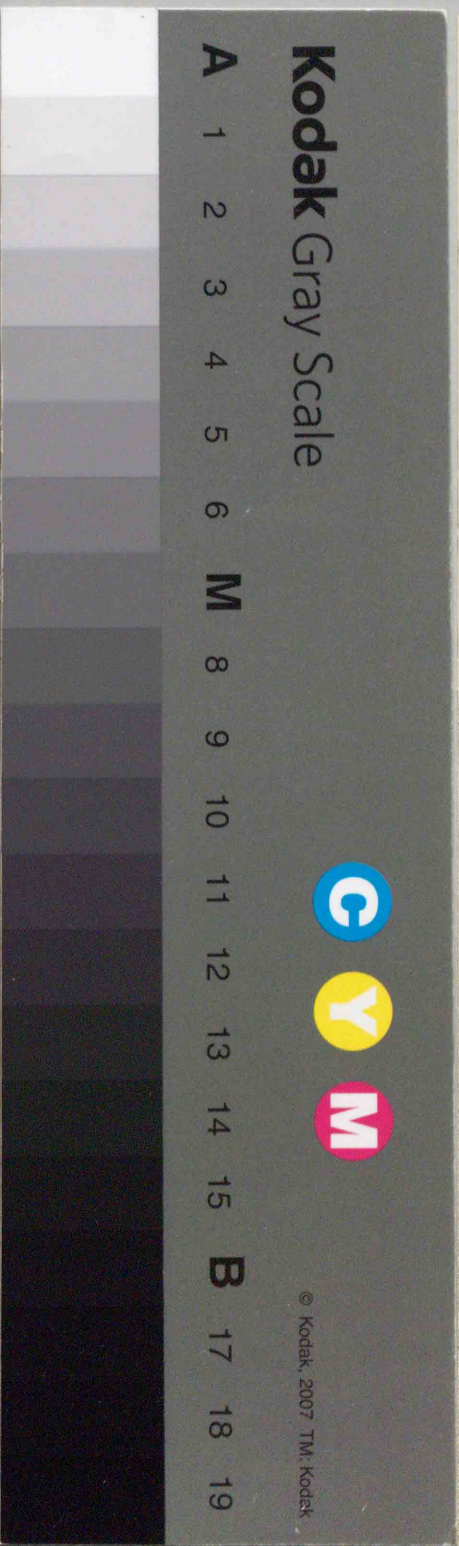
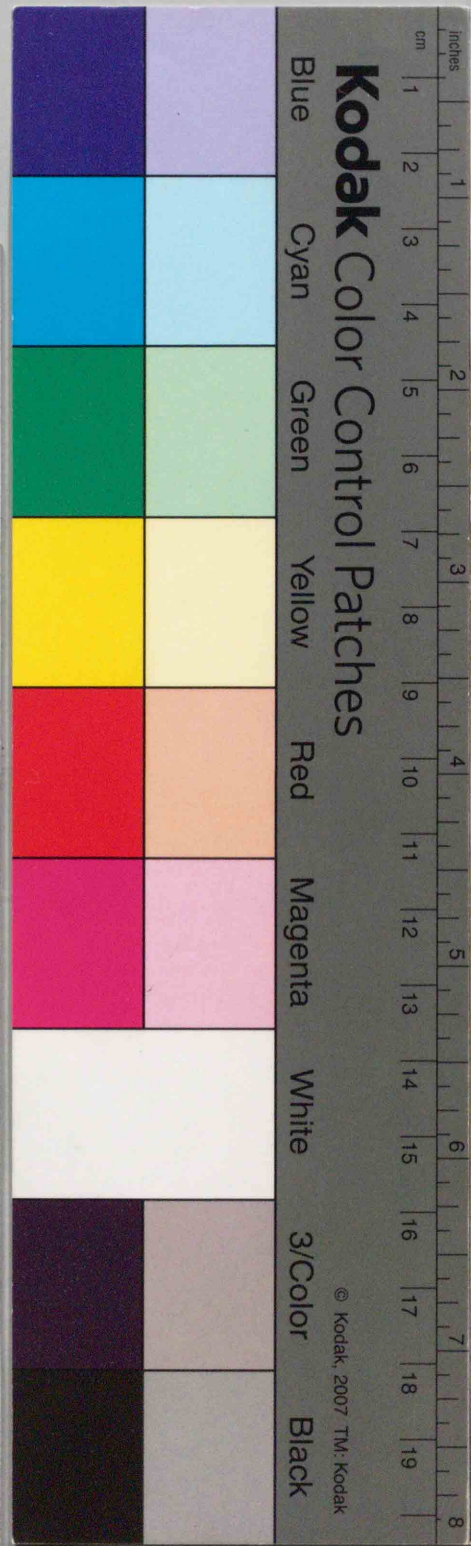


中等國文  
卷八



3759  
Fu10  
資料室



41756

教科書文庫

4  
810  
41-1929  
200030  
2024



日二月三年四和昭  
濟定檢省部文

文學博士藤井乙男編

# 中等國文

東京金港堂書籍株式會社

資料室

3759  
Fu10

格致中學校

第四學年

第四學年

第六節訓

珠算

速記

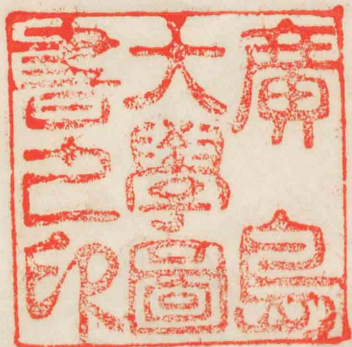
珠算

速記

第四學年

右記  
右記

右記



# 中等國文卷八

## 目次

一	朝思暮想	幸田露伴	一
二	楓の芽	(花月草紙)	五
三	光頼の参内	(平治物語)	三
四	時鐘	上田敏	元
五	人の首(自習文)	高村光太郎	三
六	月の夜	樋口一葉	三
七	平家と風流生活その一	五十嵐	力
八	平家と風流生活その二	五十嵐	力

- 九 いざよふ月
- 一〇 與謝蕪村
- 一一 昨日は今日の昔
- 一二 人道
- 一三 渡邊華山
- 一四 木 枯
- 一五 壬子試筆の詞
- 一六 宇治川先陣
- 一七 日本美術の特質
- 一八 四季
- 一九 萬里長城

- 阿 佛 尼
- 藤岡作太郎
- (鈴屋集)
- 高山林次郎
- 松崎 慊堂
- 室 鳩 巢
- (源平盛衰記)
- 黒田 鵬心
- 卜部 兼好
- 土井 晩翠

- 二〇 大原御幸
- 二一 曲亭馬琴その一
- 二二 曲亭馬琴その二
- 二三 芳流閣
- 二四 おどろの下
- 二五 落花の雪
- 二六 知己
- 二七 百蟲譜
- 二八 水百態
- 二九 色彩美の觀賞(自習文)
- 三〇 國體の精華

- (平家物語) 九
- 瀧澤馬琴 三
- (増鏡) 二六
- (太平記) 三
- 綱島梁川 三六
- 横井也有 三
- 市島春城 一六
- 松本亦太郎 一五
- 穂積八束 三

格致中學校 第四學年 藤谷節朗

朝思暮想

一 朝思暮想

朝思暮想、朝思暮想。善いかな、朝思暮想や。人當に、朝思暮想すべきなり。

思ふを人といふ。思はざるを土といひ、石といふ。日出で思ふ。思ふによりて、人幸に入たるなり。然らずんば、人の土石たること久しからん。

想ふを我といふ。想はざるを木といひ、竹といふ。日入つて想ふ。想ふによりて、我幸に我たるなり。然らずんば、我の



格致中學校 第四學年 藤谷節朗

中等國文 卷八

幸田露伴

文學博士、學  
者小説家、學  
慶應三年江戸  
に生る。

一 朝思暮想

幸田露伴

朝思暮想、朝思暮想。善いかな、朝思暮想や。人當に、朝思暮想すべきなり。

思ふを人といふ。思はざるを土といひ、石といふ。日出で思ふ。思ふによりて、人幸に入たるなり。然らずんば、人の土石たること久しからん。

想ふを我といふ。想はざるを木といひ、竹といふ。日入つて想ふ。想ふによりて、我幸に我たるなり。然らずんば、我の

朝思暮想

木竹たること久しからん。

人の土石たるを免れ、木竹たるを免るゝは、たゞ思ふあり、想ふあるが爲なり。大いなるかな、思想の人におけるや。

朝思暮想、朝思暮想。愚なるかな、朝思暮想や。人當に、朝に

思無く、暮に想無かるべきなり。

思ふを苦といふ。思ふ無きを安といひ、樂といふ。眼を思

ふ時は、眼を病めるなり。財を思ふ時は、財に渴せるなり。道

を思ふは、道猶未だ我に存せざるなり。日出でて、便ち思ふ。

これ、日出でて、便ち苦有るなり。その思ふ無きに當りては、即

ち苦無からん。徒らに思ひ、徒らに苦しみ、多く思ひ、多く苦し

む。思の即ち苦なるを知らざるに非ずして、しかも、思はざる

能はずして思ひ、苦しまざる能はずして苦しむ。人も亦土石

第五卷

此の節は、朝思暮想の意を、其の終焉に於て、

瞿然

に如かずといふべし。

想ふを癡といふ。想ふ無きを明といひ、達といふ。鬼を想

ふ者は、中夜瞿然たり。鬼の來りて我を悩ますに非ず、吾の想

の我を悩ますなり。その癡惑むべし。梅子を想ふ者は、舌頭

酸を覺ゆ。梅子の來りて、我を欺くに非ず。吾の想の我を欺

くなり。その癡笑ふべし。法を想ふものは、理窟勃窣葛藤荆

棘の中に七顛八倒して、枉げて心力を傾注し、乾闥婆城を成し、

氣盡き身衰ふるに及んで、頽然として萎頓疲弊す。その癡、ま

た悲しみ傷むべし。日入りて、猶想ふ。これ、日入りて、猶癡な

るなり。その想ふ無きに當りては、即ち悩まさるゝ無く、欺か

るゝ無く、萎頓疲弊すること無く、清風空を度り、明月軒に當る

の状あらん。空しく想ひ、空しく癡に、愈、想ひ、愈、癡なる、想の即

乾闥婆城云々  
月初出時  
見二城門・樓  
櫓・宮殿・行人  
出入。但可三眼  
見二無二有二實  
名二乾闥婆城。  
（大智度論）  
萎頓

勃窣

ち癡なるを悟らざるにあらざるも、しかも、想はざる能はずして想ひ、癡ならざる能はずして癡なる、人も亦木竹に如かずといふべし。

人の土石に如かず、木竹に如かざるは、たゞ、思ふあり、想ふあるが爲なり。苛なるかな、思想の人におけるや。

朝思暮想。朝思、益有るなり、暮想、功有るなり。人、須く朝に思ひ、暮に想ふべきなり。朝思暮想。朝思、益無きなり、暮想、功無きなり。人、應に朝に思無く、暮に想無かるべきなり。

百日、之を學ぶ、一日、進んで思ふに若かざるなり。百日、之を思ふ、一日、退いて學ぶに若かざるなり。朝思も可、暮想も可、唯、必ず一學字を透過するを要す。

(蝸牛庵夜譚)

書取りの範圍に印を附しある課を全部省いた残りを行ふ。印を附しある課は全文解説と単語解説。

二

楓の芽

(花月草紙より)

一 楓の芽

楓の芽の紅なるに、櫛の芽の白きを見て、必ず草木の葉は緑なるものとのみはいはじとはいはじ。温泉を見て水のひややかなるのみはあらじとはいはじ。さるに、なにくれと人の五つの道をそなへて生るゝことはさらなり、人はよくもあしくも生れたるなどと、さまざま疑へることなど、賢しい人さへもいふとか。いといぶかし。

二 善を嫉む

わが悪しきをば桀紂を引きてなだめ、人の善きをば堯舜を  
 引き出でてとがむ。かれはかゝる悪しきことなしぬといへ  
 ば、げにさあらんといふ、このものかく善きことし侍りぬとい  
 へば、いかゞあらん、いぶかしといふ。げにも人は悪しき心あ  
 るものかなといへば、善き名得まほしと思ふが故に、人の悪し  
 きにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり  
 といひき。

（引出す）

三 實學

かの人は雪螢聚めし窓に年を積みて、ふみ見る道に心をつ  
 くし侍るなり、されば世の中のことにはいとく侍りとい  
 へば、さるこそ誠の道まねぶ人なりけれと譽めものするもあ  
 りとや。もとより道まねぶものは、五つの常、五つの道よりし  
 て、人ををさめ己ををさむる道まねぶより外のこととはなし。  
 されば、世の事にさとく、今のあたりのみかは、千歳の先つ世の  
 事、見ぬもろこしの昔今のさまより、盛り衰ふるさざし、人の心  
 の上より仕ふる道のくさぐさに至るまで明かなること道ま  
 ねぶ人とはいふべけれ。この世の事おろそかにては、いかで  
 道まねぶ人とはいふべからんと。

四 ことわりのまこと



まこと  
じを

ことわりなきがことわりのまことなり。ことわりのごと  
行はるゝものならば、何の難きこともあらじを、さも知らで、人  
と争ひ政を誹りなどしてたかぶる者は、ことわりのまことを  
知らぬとやいふべき。

五 聖の樂み

聖の樂しむてふことは天地の心なり。天地の心は常に春  
なれば、いつものどけからぬことなし。苦しきを樂しむには  
あらず。苦しきは苦しく、嬉しきは嬉しきに外なけれど、たゞ、  
哀樂喜怒の四つも、みな樂みの哀み、樂みの怒りにて、いはば、秋

肅殺  
閉藏

は春の肅殺、冬は春の閉藏なりといふに同じこととなん思ふ  
となり。

六 傍よりいふこと

詠歌大概に、情は新しきを先にすといふ事をなにくれとい  
へど、こはかの日々に新なりといふ心ばへにて、流るゝ水のご  
とし。されば、よきをあしく、あしきをよくなど、ひき違へてい  
ふは、珍しきにて新しきとはいはじ。花を雪と見、雪を花と見  
る、幾度いふとも、わが誠よりいへば、いつも新し。心してわざ  
といふは、新しきといふものならず。

詠歌大概  
一卷。藤原定  
家(一八二二  
一〇一)  
撰  
日々に新なり  
荀日新、日日  
新、又日新  
(湯之盤銘)

七 戸毎に富む

戸毎に富み家毎に足るなどいふはいかなることにかあらんといふに、風俗質朴にして上下の制あるをいふ。各、その分を守らず、奢に流れてゆかば、みつぎもの皆民に與ふとも、富み足ることはあらかじかし。

八 四つの時

四つの時のうつりゆくけしきこそまたなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふはいと苦し。散ればまた來ん年は咲きぬべし。いかに心を苦

しむとも、霜白く氷堅きをりに、はちすの咲くべき理なし。されど、咲くを待ち散るを惜しむは道なり。散るをよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

九 餘地

道路は足底の廣さだにあらば歩むべしといふは、例のことわりのみなり。いかで、歩むべからん。梁の上を歩まば落ちぬべし。あまりに事に甚だしく物にせちなれば、行はれぬのみかうとまれぬべし。こは、事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。

せち

ワタのし

ワタのしは、  
ワタのしは、  
ワタのしは、  
ワタのしは、  
ワタのしは、



紙草月花

一〇 禍 福

\* 禍之與福分、  
何異糾纏の。  
(漢書賈誼傳)  
わざはひさいはひは組みあふ繩のごとなることは、もとよ  
り知れることなり。もろこしの古書の、代々の亂るゝ迹を見  
たまへ。いといたうめでたしといふ所より亂るゝ端をなす  
ものぞといひしは、一言ながら心とゞむべきこととや。

十二月十九日  
平治元年  
僉議  
光頼卿信頼卿  
俱に藤原氏

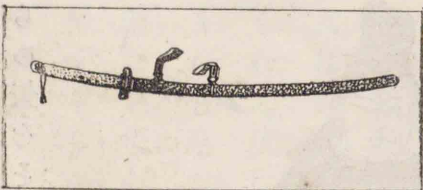
雑色  
自然の事

さきおふ  
先遣ふ  
先辨ひ

三 光頼の参内

光頼

内裏には、十二月十九日、公卿僉議とて催されけり。左衛門  
督光頼卿、この程は、信頼卿の振舞過分なりとて、不参におはし



時 繪 太 刀

ましけるが、参内して承らんとて、殊に鮮かに  
束帯ひき繕ひ、時繪の細太刀おとなしやかに  
佩きたまひ、乳母子の桂、右馬允範能に、膚に腹  
巻を着せ、雑色の装束にいでたせ、自然の事  
もあらば、人手にかくな。汝が手にかけて、光  
頼が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、その  
外、清げなる雑色四五人めし具して、大軍陣を  
張りて、處々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らか

三 光頼の参内

光

三

ひらむ  
そばむ

におはせて入りたまへば、兵どもも大いにおそれ奉り、弓をひ  
らめ矢をそばめて通し奉る。



如何に振舞ふとも、彼は右衛門督我は左衛門督なれば、下には

さて、僉議の座を見たまへば、信賴卿一座（伏せ奉りて）して、その座の上（上臈たち皆下にぞ著かれける）。光賴卿、こは、不思議のこ  
とかな。人は

光賴

宰相  
しどけなし  
色代

顯賴「光賴  
惟方  
女信賴

著くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ、世にしどけな  
う見え候へ。」と色代して、しづしづと歩み、信賴卿の上にむずと  
著きたまふ。

光賴卿は、信賴卿のためには母方の伯父なる上、大力の剛の  
人なれば、殊におそれて見えられたり。右の袖の上に居かけ  
られて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿、あなあさ  
ましと見たまふに、光賴卿、下襲の尻ひき直し、衣紋繕ひ、笏とり  
直し、氣色して、今日は、衛府督が一座する日と見えて候。召に  
參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて、參内す  
る所なり。抑、何事の御詫ぞ。」と問ひけれども、信賴卿、物ものた  
まはず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして、僉議の

見參の板

沙汰もなし。程經て、光賴卿つい立ちて、惡しう參つて候ひけり。と、しづしづと歩み出でられけり。

歩み出でられけり

光賴卿、かやうに振舞ひたまへども、急ぎても出でられず、見參の板高らかにふみ鳴して立たれたりけるが、彼方に、弟の別當惟方のおはしけるを見て、招き寄せのたまひけるは、公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。

あなる

有識

まことやらん、光賴も、死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承るが如くは、その人皆當時の有識、然るべき人どもなり。

その内に入らんこと、甚だ面目なるべし。さても、先日、右衛門督が車の後に乗つて、少納言入道が首實檢のために、神樂岡へ向はれけることは如何に。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衛大將、檢非違使別當は、他に異なる重職なり。その職

少納言入道  
藤原通憲入道  
信西  
神樂岡  
京都市吉田町  
の東にあり。

先蹤

天氣

に居ながら、人の車の後に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。とのたまへば、別當、それは、天氣にて候ひしかば、とて、赤面せられけり。

勸修寺内大臣  
高藤

三條右大臣  
高藤の子定方

英雄

もどく

光賴卿、重ねて、こは如何に、敕諭なればとて、いかで存する旨を一議申さざるべき。我等が曩祖、勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふことは、皆、これ、徳政なり、一度も惡事に從はず。當家は、させる英雄には、あらざれども、偏に、有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかる、程の事は、なかりしに、御邊、始めて、暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。右衛門督は、御

主上  
 二條天皇。  
 黒戸御所  
 清涼殿の北部  
 にあり。  
 上皇  
 後白河上皇。  
 一本御書所  
 大内の東門を  
 入りて南にあ  
 り。  
 温明殿  
 紫宸殿の東に  
 あり。

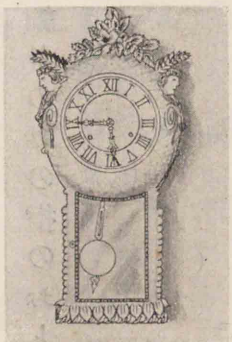
邊に大小事を申し合すところ聞ゆれ。相構へて相構へて、隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやう思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。黒戸御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽は何處に。夜の御殿に。と、左衛門督次第に尋ねたまひければ、別當、かくぞ答へられける。

光頼卿、聞きもあへず、われ、如何なる宿業によつて、かゝる世に生れあひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、この有様を聞かん輩は、耳をも口をも洗ひぬべくこそ侍れ。とて、うへのきぬの袖しぼるばかりに泣かれけり。信頼卿の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見えたまひしが、うち萎れてぞ出でたまひける。

(平治物語)

上田敏  
 英文學者、詩  
 人、文學博士、  
 京都帝國大學  
 教授、大正十  
 三年歿、年四  
 十五

柵杖



四時鐘

上田敏譯

館やかたの闇の、静かなる夜にもなれば、訝しや、  
 廊下のあなた、かたことと、柵杖かせづのおと、杖の音。  
 「時はし」の階はしのあがりおり、小股に刻む音なひは、  
 これや時鐘ときねの忍び足。

さらばふ  
渡殿

硝子の蓋の後には、白鐵の面飾なく、  
花形模様色褪めて、時の數字もさらばひぬ。  
人の氣絶えし渡殿の、影ほのぐらき朧月よ、

これや時鐘の眼の光。

うち沈みたるねび聲に、機のおもり、音ひねて、  
槌に鑢の音もかすれ、言葉悲しき木の函よ、  
細身の秒の指のおと、片言まじりおぼつかな、

これや時鐘の針の聲。

コンパス  
(Compass)

四時鐘

角なる函は慳づくり、焦茶の色の框はめて、  
冷たき壁に封じたる棺のなかに隠れすむ。  
「時の老骨、きしきしと、數噛む音の齒ざしりや  
これぞ時鐘の恐ろしさ。

げに時鐘こそ不思議なれ。

あるは、木履を曳き悩み、あるは徒跣に音を竊み、  
忠々しくも、いそしみて、古く仕ふるはした女か。  
柱時鐘を見詰むれば、針のコムパス、身の搾木。

(路傍)

三

高村光太郎、  
彫刻家、詩人、  
東京の人、  
室技藝員、  
光雲の男、  
京美術學校、  
京美術學校、  
彫刻出身、  
影東村

五 人の首 (自習文)

高村光太郎

生活背景  
(顔といふ形  
の内に生活や外  
の生活がひるが  
つてゐること。

私は電車に乗ると異常な興奮を感じる。人の首がすらりと前に  
並んで居るからである。人間移動展覽會と戯に之を稱へて、よく此  
の事を友達に話す。近代が人に與へてくれた特別な機會である。  
此處に並んでゐる首は、美術展覽會における繪畫彫刻の首と違つて、  
觀られる爲に在るのではない。たまたに見られ、眺められ、感嘆せられ、  
羨しがられる爲に在る事を自ら意識してゐる様な男性女性に會ふ  
事もあるが、其とても、活世間といふ一つの活舞臺の中では、おのづか  
ら活きた事情に取巻かれて、壁上にかかり、臺座のうへに載つてゐる  
作られた首のやうなわざとらしさ一點ばかりではない。ロクでもない  
い美術品の首よりも、私はこの生きた首が好きである。此處に並ん  
でゐる首は、皆一つの生活背景を持つ。皆一つの生活事情を持ち、毎

屈託  
その事のみ氣  
にかけること。  
放心  
心が外へそれ  
てゐること。

日の生活に打込んでゐる。或者は屈託し、或者は威張り返り、或者は  
想像もつかない悲しみに被はれ、或者は楽しく、或者は放心してゐる。  
四隣人無きが如く、連れの人と家庭の内輪話をしてゐるお神さんも  
ある。民衆論を論じてゐるロイド眼鏡の青年もある。古着市に持  
ち出した荷物を抱へてゐる阿父さんもゐる。其が、みんな自分達の  
内心に持つてゐるものを思はず顔に露出して腰かけてゐる、むしろ  
痛々しい程に感ずる時もある。

人間の首ほど微妙なものはない、よく見てゐると、まるで深淵にの  
ぞんでゐる様な氣がする。其の人をまる出しにしてゐることも思は  
れるし、又祕密のかたまりの様にも見える。さうして、結局、其の人の  
極印だなど思はせられる。どんな平凡らしく見える人の首でも實  
に二つと無いそれぞれの機構を持つてゐる。内心から閃めいて來  
るものが見える時は、其の平凡人が忽ち恐ろしい非凡の相を表はす。

極印  
こゝでは、そ  
の人の性質な  
どを示すしな  
かなるし、の  
意。



電車の中でも時々さういふ事を見る。

人の首の中で一番人間の年齢を示してゐるのは、頂部である。所謂首すぢである。顔面では年齢をかくせるが、首すぢではごまかせない。あらゆる年齢に従つて、首すぢは最も微妙に人間らしい味を見せる。赤坊のぐらぐらな頂、小學校時代の初毛の生えた曲線の多い首すぢ、殊にえり際、大人と小人との中間の人の首すぢを見るのは、特別に面白い。大人になりかかつて行つて、此處にだけまだ子供が残つてゐる青年などは、殻から出たての蟬の様に新鮮である。

三十代四十代の男の頼もしい首すぢ、又初老の人の首すぢに寄る横の皺、私は老人の首すぢの皺を見る時ほど深い人情に動かされる事は無い。何といふ人間の弱さ、寂しさを語るものかと思ふ。電車の中に立つてゐて、眼の下にさういふ一人の老人の首すぢを見る時、老年のさびと莊嚴さを身にしみて感ずる。

鼻と口との關係は、人の本性を一番多く物語る。鼻の下の長さ短かさ、出張り方、圓さ、厚さ、薄さ、千種萬様で、實際人が想像してゐるよりも以上の變種に富んでゐるのは、此の部分である。鼻の下、口の上を見る時、その人がまる出しかと思ふ時がある。一番人間の生物としての方面を示してゐる。又その人の天性の美も、此處に多く無意識に出てゐる。

頬のうしろ、顎から頤にかけては、其の人の弱點を一番多く持つてゐる。誰でもさうである。其だけに又最も特質的な魅力もある。顎の美しさは、最も彫刻的の微妙さを持つ。

運動の無い前額から、顛頂にかけての頭蓋部が、最も動的な其の人の内心の陰影を顯はすのは不思議である。額の皺が人間の閱歷を如實に語るものである事は、言ふ迄もなからう。

人間の首には、先天の美と、後天の美とがある。此の二つが分ち難



イクスフェイトスド

くまじり合つて、大きな調和を成してゐる。先天の美は言ふ迄もないが、後天の美に私は強い牽引を感ずる。

が老人を特別に好むのは此の故もある。

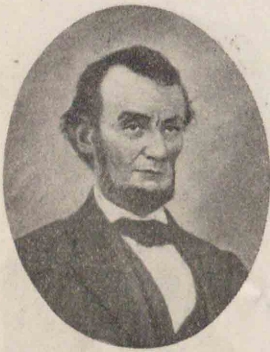
閱歴が造る人間の美である。私

だから寫眞では、赤坊だけがよく寫る。後天の美を本當に認め得るのは、活きた眼だけである。機械では不可能である。寫眞に寫ると實際よりも美しくなる人は、此の先天の美に恵まれてゐる人



イリベドンリトス

ドストイエフスキイ (Dostoevsky) ロシアの文豪、一八二一年—一八八一年  
ストリンドベリ (Strindberg) スウェーデンの作家、一八四九年—一九一二年  
ロマン、ロラン (Romain Rolland) フランスの作家、批評家。一八六六年生。一八九一年—一九一八年  
ポエ (Edgar Allan Poe) アメリカの詩人、短篇作家。一八〇九年—一八四九年



リンカーン

てゐる當人に會つてみたかつたといつても思ふ。近くではレニンの首が無比である。レニンの性格に關する悪口を澤山きくけれども、私は其を信じない。彼の首が、彼の決して不徳な人でなかつ



レニン

であり、寫眞では悪いが本人に會ふと美しいといふのは、此の後天の美、閱歴、生活性格、陶冶等から來る美を多分に持つてゐる人の事である。概して文藝家の首には深みがある。

ドストイエフスキイ、ストリンドベリ、ロマンロラン、皆さうらしい。ポエ、ヴェルレエヌ等は何といふ不思議な首だらう。彼等の詩そのものと思ふ。政治家では、リンカーンの首がすばらしい。生き

ヴェルンヘム  
(Verulam)  
フランシスの詩人、一八四四年、一八九六年、リンカーン

北アメリカ合衆國第十六代大統領、一八六〇年、一八六五年、レニーン  
(Nikolai Lenin)  
ロシアのソヴエツト政府の指導者、一八七〇年、一九二四年、ヨネ、ノグチ、野口米次郎、詩人



野口米次郎

ないやうだ。

日本の文藝家の首にも興味がある。知らないが、詩人では千家元麿氏の首に無類な先天の美がある。室生犀星氏の首には、汲めども盡きない味がある。彼の顎と眼とは珍寶である。ヨネ、ノグチ氏の首も、十目の

た事を證據立ててゐる。野心ばかりの人に無い深さと美とがある。ナポレオンよりも好い。ナポレオンにもつと野卑な處がある。近世の支那にはまだ人物が出



高橋是清



濱口雄幸

時代に肖像を畫いたのがあるので知つてゐる。彼の首には秀抜な組立がある。彼を彫刻で作らなかつたのが心残だ。武者小路氏の前額と後頭と眼とはすばらしい。凡人崇拜の戸川秋骨氏の顎と口とは凡人どころでない。俳優では團十郎が頭に残つてゐる。今の政治家は誰も知らないが、寫真で見ると、高橋是清氏と濱口雄幸氏とが面白い。濱口氏の首は、いつか作つてみたいと思つて窺つてゐる。此の人は彫刻に殊に好い。

戸川秋骨  
名は明三、英語學者、慶應義塾大學教授

樋口一葉  
小説家、明治五年生  
夏子、東京、明治二十五年歿

六月の夜

樋口一葉



群雲すこしあるもよし、無きもよし、みがきたてたるやうの  
 月のかげに、尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかる  
 べし。三味も同じこと。琴は  
 西片町あたりの垣根ごしに聞  
 ききたるが、いと良き月に弾く人  
 の影も見まほしく、物がたりめ  
 きてゆかしかりき。親しき友  
 に別れたる頃の月、いとなぐさ  
 めがたうもあるかな、千里のほかまでと思ひやるに、添ひても  
 行かれぬものなれば、唯うらやましようて、これを假に鏡となし



月夜

たらば人のかげも映るべしやなど果敢なき事さへ思ひ出で  
らる。さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆるかげ物いふ  
やうにて、手すりめきたる處に寄りて久しう見入るれば、はじ  
めは浮きたるやうなりしも、次第に底ふかく、此の池の深さい  
くばくとも測られぬ心地になりて、月は其の底の底のいと深  
くに住むらん物のやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見る  
に、空なる月と水のかげと、孰れを誠のかたちとも思はれず、物  
ぐるほしけれど、箱庭に作りたる石一つ、水の面にそと取落せ  
ば、さゝ波すこし分れて、是にぞ月のかげ漂ひぬ。斯くはかな  
き事して見せつれば、甥なる子の小さきが眞似て、姉さまのす  
る事我れもすとて、硯の石、いつのほどに持て出でつらん、我も  
お月さま碎くのなりとてはたと捨てつ。それは亡き兄の物

さながら

あくがる

なりしを、身に傳へていと大事と思ひたりしに、果敢なきことにて失ひつる、罪得がましき事とおもふ。此の池かへさせてなど言へども、未ださながらにてなん。明けぬれど月は空に還りて名残もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん、夜な夜な影や待ちとるらんとあはれなり。嬉しきは月の夜の客人、常はうとくしくなどある人の、心安げに訪ひよりたる、男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば、如何ばかり嬉しからん。みづから出づるに難からば、文にてもおこせかし、歌よみがましきは憎きものなれど、かゝる夜の一言には、身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占うりのこゑ、汽車の笛の遠くひびきたるも、何とはなしに魂あくがる、心地す。

(そとること)

五十嵐力

評論家、早稲田大學文學部、長、文學博士、明治七年山形縣に生る。

大黒柱

七 平家と風流生活 (その二)

五十嵐 力

人事は多くは天である。源平の盛衰も、正にその一つであらう。けれども、成敗の跡に就いて考へると、平家の衰へたには種々の原因がある。重盛清盛といふ大黒柱が倒れたのも、その一つであらう。皇室の信任を失つたのもその一つであらう。悪政によつて民心の離れたのもその一つであらう。利福權勢を一門で獨占したのもその一つであらう。しかし、ここにそれ等のいづれにもまして重大な原因、殊に文學の方面から觀て非常に面白く、そのために、平家物語の主なる文學的價値が成り立つたとも思はれる大切な原因がある。外ではない、平家の一門が平安朝の文明に魅せられ、武人の本領を忘

れて、公卿の生活を摸倣したことである。

平家は、清盛の手によつて天下を掌握した。而して、一門の間で朝廷の主なる顯職を占め、日本六十餘州の半以上を領し、女を后妃に納れ、畏くも外戚にまでなつて、宮闕にも仙洞にも劣らぬ榮華を極めるやうになつた。思ふことは爲される、爲すことは遂げられる、かやうな境遇に在つて、誰か武を練り兵を談ずることを好まう。誰かまた甲冑を着け、劔戟を閃かす殺伐なる生活を愛しよう。治に居て亂を忘れずといふは困難なることである。喉元過ぐれば熱さを忘れるのは、人情のはかなさである。

平家の境遇は、まさしくかうであつた。平家の人たちは、概して、正直で單純で表裏のない人々であつた。彼等は、太平の

仙洞

殺伐

世、敵のない世界、極端にわが儘の利く時代、平族でなければ人でないといはれた時に處して、武人生活に代るべきものを求め、すぐに前代の風流閑雅な公卿生活に目を留めたであらう。かくして、彼等は腰に佩いた太刀を捨て、身を蔽ふ窮屈な甲冑を脱して、相率ゐて、束帶・衣冠・詩歌・管絃の風流生活に赴いた。而して、やがて、その新生活から、烏帽子のため様、衣紋のつくろひ様に六波羅風を案出して、流行の魁をするやうになり、詩歌・管絃の藝術に於ても、藤原氏の名匠と相伍して敢へて譲らざるに至つた。彼等の公卿化、風流化は、平家物語中に面白く寫されてゐる。三萬餘騎の軍勢を率して頼朝の討手に向ひ、富士川の水禽の羽音に驚いて、矢一つだに射ずして逃げ歸つた維盛・忠度を描寫して、

帯佩

着背長

唐櫃

連錢蘆毛

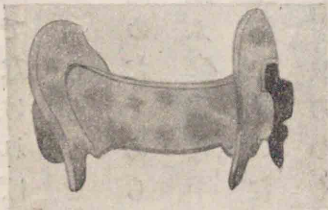
沃懸地



着背長

大將軍小松權亮少將維盛は、生年二十三、容儀帶佩繪にかくとも筆も及び難し。重代の着背長唐皮といふ鎧をば、唐櫃に容れて昇かせらる。道中には、赤地の錦の直垂に

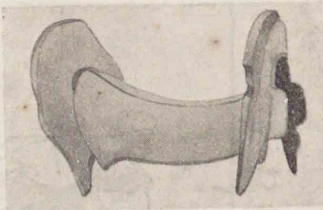
萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乗りたまへり、副將軍薩摩守忠度は、紺地の錦の直垂に、黒絲緘の鎧着て、黒き馬の太う逞しきに、沃懸地の鞍を置いて乗りたまへり、馬鞍、鎧、兜、弓箭、太刀、刀に至るまで、照り輝くほどに出で立ちたれば、珍



鞍の輪覆金

安元の春の頃  
二年三月四日。  
院の御所  
後白河法皇。

垣代



沃懸地の鞍

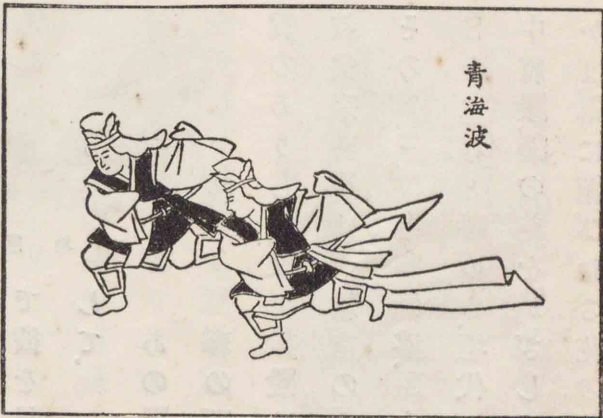
しかりし見物なり。沃といひ、又、同じ維盛が、熊野參詣のをりに、都で彼を見知つたといふ者の物語つた話として、

あの殿の未だ四位の少將なりし安元の春の頃、院の御所法住寺殿にて、五十の御賀のありしに、父小松殿は、内大臣の左大將にておはします、叔父宗盛卿は、大納言の右大將にて階下に著座せられき。その外、三位中將知盛、頭中將重衡以下一門の公卿殿上人、今日をはれと時めき、垣代に立ちたまひし中より、この三位の中將殿、櫻の花をかざして、青海波を舞うて出でられたりしかば、露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地を照し、天も



佐殿  
兵衛 佐源頼朝

朗詠  
昔は海夜月  
踏む花は惜しき春



青海波

耀くばかりなり。  
と記されてゐる。また、重衡が  
生捕となつて鎌倉に送られた  
時、頼朝と齋院次官親義とが  
ういふ物語をしてゐる。

佐殿宣ひけるは、平家の人々  
は、この二三箇年は、軍合戦の  
營みの外は、また他事あるま  
じとこそ思ひしに、さても三  
位の中將の琵琶の撥音、朗詠  
の口ずさび、終夜立ち聞きつるに、優にやさしき人にては  
しけりと宣へば、親義申しけるは、誰も夕承りたくこそ候ひ

勞る

しかども、折節勞ることの候ひて承らず候。この後は、常に  
立ち聞き候ふべし。平家は代々歌人、才人たちにてわたら  
せたまひ候。先年あの人々を花に譬へて候ひしには、この  
三位の中將殿をば牡丹の花にこそたとへて候ひしかとぞ  
申しける。三位の中將の琵琶の撥音、朗詠の口ずさび、兵衛  
佐殿、後までもあり難きことにぞ宣ひける。

これで、重衡その他の平家の公達が、殆ど皆、歌舞音曲の達人で  
あつたこと、そして、それが身方にも敵にも愛で羨まれたこと  
がわかる。頼朝が生捕の人の旅のすさびを立聞きまでして、  
生涯の思出にほめ囃しながら、固く武人の本領を持して、その  
風流に倣ひもせず、また倣はせもしなかつたのは、彼が武人的  
政治家として偉い所であらう。

八 平家と風流生活 (その二) 五十嵐 力

平家物語の作者は、九郎判官義経が先陣の供奉を承つた時の様子に就いて、

\*治承四年。  
御禊  
内辨  
幄屋

一年の御禊の行幸には、平家内大臣宗盛公、内辨を勤めらる。幄屋に着いて、前に龍旗立てて居たまひたりし氣色、冠際袖のかゝり表袴の裾までも、殊に勝れて見えたまへり。その外、三位の中將知盛、頭中將重衡以下近衛の司、御綱に候はれしにはまたたち並ぶ方もなかりしぞかし。今日は九郎大夫判官義経先陣に供奉す。これは木曾などには似ず、以ての外に京慣れたりしかども、平家の選屑よりもなほ劣れりと云つてゐる。殿上の交りをさへ嫌はれた者の子孫が、十年

今日  
壽永三年十月  
二十五日

生粹

前後の念入な修業に依つて、いかに生粹の公卿になりすましか、而して、それに比べて、東夷の源氏の最優者が、どれほど見劣りがしたかが、これによつて窺はれる。しかも、一方、風流の道の練達、公卿化の程度に於て、源氏の最優者が平家の中の選屑にも劣つたやうに、武道の練達、軍の爲ぶりに於て、平家の最優者が源氏の選屑にも劣るらしくなつて來たことは、齋藤別當實盛が蒲原の野陣で維盛に答へた所を見ても想像される。大將軍權亮少將維盛、東國の案内者として、長井の齋藤別當實盛を召して、汝ほどの強弓精兵、八箇國には如何ほどあるぞ。と問ひたまへば、齋藤別當あざ笑つて、さ候へば、君は實盛を大箭とおぼしめされ候ふにこそ。わづか十三束をこそ仕り候へ。實盛ほど射候ふ者は、八箇國にいくらも候。大箭

定

大名

と申す定の者の十五束に劣つて引くは候はず。弓の強さ  
 もしたゝかなる者の五六人して張り候。かやうの精兵ど  
 もが射候へば、鎧の二三領は容易う射徹し候。大名と申す  
 定の者の、五百騎に劣つて持つは候はず。馬に乗つて落つ  
 る道を知らず、悪所を馳すれど馬を倒さず。軍はまた、親も  
 討たれよ、子も討たれよ、死ぬれば乗り越え、戦ひ候。  
 西國の軍と申すは、すべてその儀候はず。親討たれぬれば  
 引き退き、佛事孝養し、忌明けて寄せ、子討たれぬれば、その愁  
 へ歎きとて寄せ候はず。兵糧米盡きぬれば、春は田作り、秋  
 刈り收めて寄せ、夏は暑しと厭ひ、冬は寒しと嫌ひ候。東國  
 の軍と申すは、すべてその儀候はず。  
 物語は正史でないけれども、源平兩家の武人の間に、かやう

九牛の一毛

亞流

な相違を生じて來たのは、争はれぬことであらう。  
 かやうにして、十餘年の歲月は、平家から武人の骨を抜いて、  
 すつかり風流閑雅の大宮人を作り上げた。  
 忠度の歌、經正の琵琶、重衡の朗詠、敦盛の笛、平家物語に擧ぐ  
 る所はさまざま多くはないが、これは無論九牛の一毛で、彼等は  
 相率ゐて大宮人の亞流となつたのであらう。  
 武人として興つた平家が、公卿生活の摸倣に滅びた回顧の  
 悲劇の哀れな暗示的な味はひを、私は平家物語における中心  
 興味の最も重要な一つと思つてゐる。(平家物語の新研究)

九 いざよふ月

阿佛尼

阿佛尼 權大納言藤原為家の妻、北林禪尼ともいふ、弘安六年九月歿。

解題

時代 鎌倉時代  
作者 松平定房の室阿佛尼



阿佛尼の岡の葛の葉かへすがへすも  
書置く跡たしかなれどもかひなきものは親のいさめなり。  
又賢王の人をすて給はぬ政にももれ忠臣の世を思ふ情にも捨てらるゝものは數ならぬ身

一つなりけりと思ひ知りながら、又、さてしもあらで、なほ、このうれへこそやるかたなく悲しけれ。

さてしも  
又とうめとつて

あだ  
もや

川田

二たび救をうけ

藤原為家、實治中、續後撰集を撰し、正元中、續古今集を撰す。三人のをのこご守。爲顯・爲相・爲えに

細川の流  
播州細川莊。

更に思ひつづくれれば、やまとうたの道は、唯、誠少く、あだなるすさびばかりかと思ふ人もやあらむ。日の本の國に、天の窟戸開けし時、よもの神だちの神樂の詞をばじめて、世を治め物を和ぐる媒となり、にけるとぞ、この道の聖だちはしるし置かれたりける。  
さて、また集を撰ぶ人は例多かれど、二たび救をうけて、世に聞えあげたるは、たぐひ猶ありがたくやありけむ。そのあとにしも携はりて、三人のをのこごども、百千のうたの古反故どもを、いかなるえにかありけむ、預りもたることあれど、道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへ、とて、深き契を結びおかれし細川の流も、故なくせきとめられしかば、後とふ法の燈も、道を守り家を助けむ親子の命も、諸共に消えを争ふ年月を経

九 いざよふ月

聖 故 故



\*攝津國東成郡  
毛馬村。

いかだしの養  
やあらし(嵐)  
の花ごろも  
早野巴人  
其角門、江戸  
年(二四〇二)  
歿す。

印金堂  
山城國葛野郡  
妙光寺の山上  
に在り。

春星、蕪村、夜半亭等の號あり。攝津\*の人、幼にして母の生家に  
養はる。その家、丹後國與謝郡に在り。後年、與謝氏を名のれ

あしのきや  
のむらう

蕪

るは、これがためなり。長  
じて江戸に赴き、俳諧を早  
野巴人に學ぶ。後、京に住み  
て、畫と俳とを以て世に立  
てり。天明三年六十八歳  
にして歿す。



蕪村 肖像

蕪村好んで京畿の名所  
及び古代の風俗を詠ず。

例へば、

春月や印金堂の木の間より

鳥羽殿  
山城國紀伊  
衆徒

春水や四條五條の橋の下

郭公平安城をすぢかひに

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな

寒月や衆徒の群議の過ぎて後

此の如きは、山紫水明にして、また、千年の歴史ある舊都の地  
に住みたればなるべし。されど、その畫は、これに異なり。蕪  
村の特色は、新に漢畫を起せるにあり。されば、その俳諧に屢  
漢語を用ひしは、正に、その畫法と相應するものと謂ふべし。

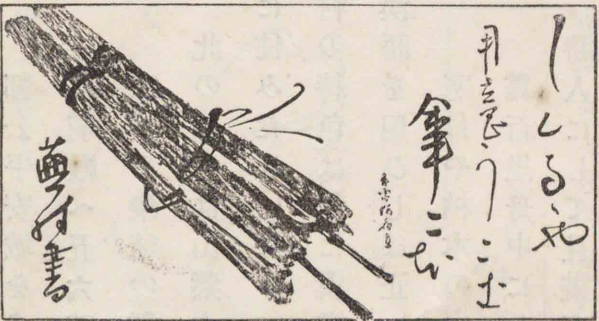
寒月や枯木の中の竹三竿

霜百里舟中にわれ月を領す

詩人にして且畫家なるもの、その所詠の畫趣あるが少から  
ざるは、當然のことなり。

しぐるゝや  
用意かしこき  
傘二本

彭百川  
張の、尾  
に、京、都  
三、二、一  
年、四、曆  
十、三、五  
六、歿、年



粗畫多く、また、好んで芭蕉以來の俳諧の名家の像を畫く。運

牡丹散りてうちかさなりぬ二三片

柳散り清水涸れ石處々

一行の雁や端山に月を印す

與 謝 燕村が畫道の功も、敢へて俳諧に譲  
らず。されど、彼の畫家としての聲價

燕は、歿後に至りて愈、高くなりぬ。その

村 畫、或は彭百川に學べりといへど、自ら

稱して、吾に師なし、古今の名畫を以て

師とす。といへり。その元明諸大家の

蹟 遺墨を研究して、一家を成せること、推

して知るべし。燕村の畫く所、減筆の

津々

俳畫

田野村竹田  
豊後の人、  
保六年(二四  
九五)歿す。  
年五十九。

傳彩

誣ふ

泛々

品隣

筆、簡にして狂兒戲の如くにして、しかも趣味津々たり。屢題

するに俳句を以てす。後世俳畫と稱する略畫は、實に、この翁

に至りて興りしなり。然れども、燕村の作品は、唯、この種の粗

畫のみにあらず。緻密なる山水等の畫、また固より存す。而

して、その畫を作るや、一室に籠りて人の入るを禁じ、獨坐して

思を凝せりといふ。田能村竹田、燕村を評して曰く、用筆傳彩、

全然、明人のごとし。布置點景、これを邊邑僻境有る所の寔景

に取る。故に、景は新に、法は古く、意を用ふること最も深し、高

名の下、虚士なしとは、洵に誣ひざるなり。と。世人、或は彼の密

畫を俗氣多しといふ。しかも、泛々たる世人の褒貶は取るに

足らず、名流竹田の品隣は、以て、燕村の價を定むべきなり。燕

村の門下に、松村月溪あり。月溪、畫道の門人なりと雖も、亦俳道

に遊べり。

花踏んで雛にかくる、鼠かな

南より風吹く藤のくもりかな

月溪某年事によりて、攝津吳服の里に隠れ、こゝに春を迎ふ。

よりて、氏を吳名を春と稱す。後、應舉の風を慕ひて、その門人

たらんことを請ふ。應舉辭して曰く、吾いかで君が師たるに

堪へんや、唯俱に學び、俱に勵むべきのみ」と。よりて、莫逆の友

となる。天明の火災の後、應舉と同居し、晝道を討論して、竟に

その奥旨を悟れりといふ。かくて、蕪村の風を一變し、好んで

寫生をなして、一家の面目を開く。その家、京都四條にあり、世

人、その風を四條派と稱す。文化八年、六十歳にして歿す。

(近世繪畫史)

莫逆の友

天明の火災  
天明八年

一 昨日は今日の昔

本居宣長

昨日は今日の昔にては、かなくのみ過ぎに過ぎゆく世の中

をつくづくと思へば、あはれわが世もいくほどぞや手ををり

てかぞふれば、はやみそぢにもあまりにけり、命長くて七十ぢ

八十ぢいけらんにて、だにはやくなれば、過ぎぬるよと思へ

ば、まだよごもれるやうなる身もゆくさき程なきこちのし

て心ほそくぞおぼゆる

かくのみは、かなく心なき草木鳥獸の同じつらになにすと

しもなくあかしくらしつゝ、生ける限りのよをつくして、徒ら

に苔の下にくちは、てなんはいとくちをしくいふかひなかる

べきことと思ふにもよるづに、いたり少く拙き身にしあれば

いけらん

よごもる

いたり  
また

一 昨日は今日の昔

三

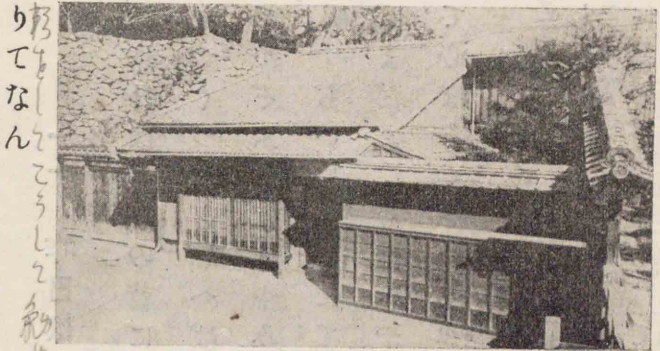


人並に彩る  
かすまふ  
かぞふ

打すてる  
はふらかす

にまれ  
相まらざる  
ゆゑつく  
あつはあらしむ

あいなだのみ  
あいなだのみ



りてなん

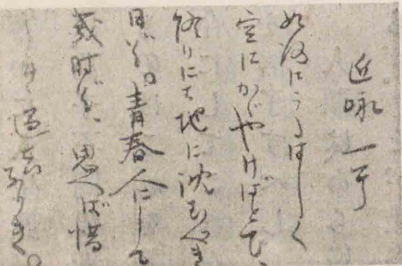
世の人なみの数にもへられ死後(シゴ)に  
何事をしいでてかは世の人にもかすまへられなからん後の  
世に朽ちせぬ名をだに見せめましと  
いと人(ひと)に似ぬおろかさへとりそ  
へてぞ悲しく心うかりける  
居(い)ざりてはた身をえうなきものに  
打(う)ちまわるとはた身をえうなきものに  
宣(のたま)はふらかしはつべきにしもあらずか  
くのみ拙(こ)くおろかなる心ながら何わ  
長(なが)ざにまれ怠りなくわざと心にいれて  
舊(ふる)つとめたあんにつひにはひとつゆゑ  
邸(やしき)かしてな(な)のめにしむるふしもなど  
づけてな(な)のめにしむるふしもなど  
か(か)はなからんとあいなだのみにか  
(鈴屋集)

一二人道

高山林次郎

高山林次郎  
評論家、博士  
と號す、明治三  
十五年、文三  
流轉  
観す

諦視



高山林次郎筆蹟

世事の常なくして、人生の長へに流轉するは、苟も生を觀じ  
世を念ふ人の容易に認むる所なるべし。然れども、一たび皮  
相の見を離れ、熟沈思熟考すれば、人生は、偶  
然徒爾なる事件によりてのみ成るものに  
あらずして、必ず、常住不易なる或るもの  
その間を貫通せるを見ん。而して、更にこ  
れを諦視し洞察し、具にその幹枝を尋究す  
れば、前に偶然なりと想はれしものも、多く  
は避くべからざる必然の徑路を經過して、  
各、その始終を遂げたるものなることを發見すべし。更に、ま

一二人道

あいなだのみにか

歲時  
方處  
史乘

悟了

炳焉

動機

不退轉

た、縦に歲時に繋け、横に方處に涉り、古今東西の史乘に照して、審かに人生興廢の跡を察すれば、この常住不易なる或るものは、萬千不同の世事を綜べ、殺活喜憂の樞機を握り、己に反するものはこれを斃し、己に順ふものはこれに幸し、成敗著落の跡、今にしてこれを見れば、儼として、一絲の増減を容さざることを悟了すべし。

人類は、あらゆる生物と共に、偶然にして生息するものにあらず。それが最終の目的に向ひて精進するものなることは、これを過去の歴史に鑑み、これを現在の状態に察し、炳焉として争ふべからざる事實なり。抑、何者が吾人に此の如き進歩的動機を與へたるか。何故に、吾人は、この最後の目的に向ひて、不退轉の精進を爲さざるべからざるか。將、又、この最後の目

此の如きは、今日における人智の能く説明する所にあらずと雖も、兎にも角にも、斯の如き進歩的動機の人性中に存在すること、また、人間の諸の歴史は、所詮、この動機の活動に驅られて、最後の目的に到達せんとするの盡力に外ならざること、疑を挾むべからざる所なり。

人間社會にありて、所謂人道てふものは、個々人の内性に存在せるこの進歩的動機の必然なる合成力にして、その目的は、人類全體の發達を催進し、以て、その理想を現實化するにあり。故に、人道は、その起源よりしてこれを觀れば、もと、個人の性格を外にして存在するものに非ずといへども、しかも、一たび、人道として存在したる以上は、その成立の目的を遂げんがために、個人に對して、絶對の制裁力を有するに至る。既に、人道は、

偏愛

人類全體の發達を目的とするを以て、個々人の生活に對して偏愛する所なし。唯己に順なるものに幸するのみ。

僥倖

若し、個人の行爲にして、人道に衝突し、若くは背反したる時は、たとひ、一旦の僥倖を得とも、竟に自家覆滅の禍を免れざるなり。若し、また、個人の行爲にして、人道に合致する時は、たとひ、一時の不幸を見るも、竟に永遠の勝利者たるべきなり。今、運命てふ語を假りてこれをあらはさば、人類の進歩的動機は、根原的運命なりといふを得べく、その人道に顯れたるものは、大いなる運命、その個人の性格に顯れたるものは、小なる運命といふを得べし。而して、小なる運命は、大いなる運命に從はざるべからざるなり。

(樗牛全集)

松崎謙堂

江戸時代の儒者、名は密、肥後、元安、弘化、十四年、七月、八日、附、小田、切、要、助、宛、て、拜、晤、したる書翰。

佐藤捨藏、一齋、安政、六年、八月、師資の禮。

熨斗目

渡邊華山

松崎謙堂

拜啓。白露の節益、御清佳珍重に存じ奉り候。私儀先日拜晤以後、始終相勝れず候處、他出大いに疲勞致し、終に霍亂病を醸し出し、最早平穩に就き候へども、未だ出行すべからず、之により、止むを得ず、拙筆を以て申上げ試み候。別事にもこれ無く、渡邊登の事に御座候。登は從來、佐藤捨藏社中に御座候處、二十年來、私方にも師資の禮を執り申候に付、私も底意なく申談じ候事に御座候。先づその人の大概を申せば、衣服にも上著、下著揃ひ候は一襲もこれなく相見え、平日他行の上著を禮服の下著に相用ひ、年始などに参り候にも、熨斗目の下著不揃の常用著物を相重ね、十年前用人の時よりその通り、只今、家老

清廉

籍記

納交

にてもまたその通りに御座候。御考へ合せ候はば相分るべく、この清廉の一端にて、萬事御推察下さるべく候。 借又、その人謙讓にして、誰人に對し候ても、一向家老風など少しも顯さ

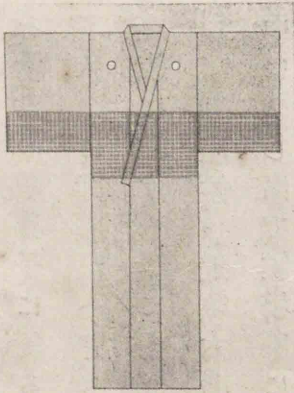


ず、人の美事は、一言一行たりと  
渡も必ず感心籍記仕り候。その  
邊、人生來繪畫を好み候へども、世  
畢の畫人と違ひ、畫書畫傳など多  
山分研究仕候より、隨分博覽の處  
も有之候間、隨て敬慕納交の人

も多く、誰にてもその人を感心せぬもの無之候。 第一は、私存  
じ候二十年以來、母親に孝養を盡し、私方へ參り候にも、晩刻に  
相成候へば、是非急ぎ辭し去り申候を、同座の者強ひて抑留仕

文飾

候へども、夜に入り候ては、老母案じ申候に付、殘念ながらとこ  
とわり罷歸り候。 たましく、その宅に參り候節も、心づき候に、  
老母に事へ候様子、何となく感心仕候事御座候。 總て、一點の  
文飾もこれなく、この事往來交  
游の談大概日録に御座候。 御  
存もこれあるべく、五郎と申す  
弟一人御座候。 二十歳ばかり  
の若者に御座候を、自身の子三  
四人有之候へども、彼を順養子に致し、母の心を安んじ申候つ  
もりの由。 然る處、去年春頃に疫邪にて死去仕候以來、母の哀  
傷を悲しみ、尙更、萬事心をつけ孝養致候様子、誰人も見受け申  
候由、私にも物語仕候。 借又、主人家困窮に付、登未だ用人勤め



鬘斗目下衣

御家督 田原藩主三宅康明子なし、異母弟友信繼嗣たるべかりしを、老臣等謀りて、之を別邸に隠居せしむ。江戶巢鴨の別邸に隠居せしむ。酒井家 姫路侯酒井忠實の第二子家を襲がしむ。直これ土佐守康直なり。

田原 三河國温美郡。

毫頭

候節、先の家老某、御家督を繼がるべき御血統有之候を病身と申立て、酒井家の公子を養子に願はれ、その持參物にて一時の急を救はれ候へども、遠祖備後三郎高德の血統こゝに絶ゆるを傷み、おのれ家老になり候へば、病身にて隠居せられ候公子に出生これ有る上は、右公子の子を當君の順養子に仕るべき様、酒井家家老に申談じ候處、初は不承知に御座候へども、登が忠誠を感じ承知致し候故、御先祖血統に復する様に相成候を、私にもその話申し聞かせ悦び申候事御座候。近頃六七歳以來凶荒打續の上、その在所田原海中にさし出で候場所にて、海嘯の患に遇ひ、一粒の租税も無之候處、種々辛苦致し、遂に餓死等のもの無之様取計らひ、その上、家中人物の用捨、領内百姓の手當等、毫頭の私無之候故、人氣悦服仕居候由。然る處、この度

牢獄の沙汰 天保十年五月、無人島開拓及び外交海防の事など論じたる著書より入牢。横議

口書

碌々 相公様 閑老水野越前守忠邦。

牢獄の御沙汰に及び、主君はじめ末々の輩まで一同悲嘆候段、御存の通り申上ぐるに及ばず候。私もその事承知致し候以來、格別焦勞仕候儀御存も下さるべく、世上の横議を傳聞仕候處、登を知らぬも愁嘆仕らざるもの無之候。六月中旬に至り、登申開相立ち、遠からず出牢と申す模様傳聞ながら、大概是相違なしと申す消息承り、先づ安心仕候。然る處、當月中旬に至り、口書仰付けられ候由、口書の結語以ての外、手重の様、復又申し觸れ候に付、獄事老練の人などに従ひ承り合せ候處、最早奉行所にて口書定まり候上は、一寸の動搖もならぬ事なれば、斯様の時分老人のいらざる事、登の天命に任すべしなど申候。如何様、私山野の隠居、碌々の老耄ながら、相公様御覽の數にも入れ置かれ候公家御恩の身にて、我弟子の列に、技藝の末に

獄 乃 細 登

誹謗

明カニシテ四目ラセシム達ラ四聰ラ世界ラ中の  
典カニシテ四目ラセシム達ラ四聰ラ世界ラ中の

進善之旌  
古之治天下、  
朝有進善之  
旌、誹謗之木。  
(史記)



渡邊華山筆耶都

申分少  
しも中  
途に壅  
滞せん  
ことを  
恐れて、  
進善之

旌誹謗之木なども立てられて、末々の雜人まで、十分存寄を申せと求められたるなり。この處など考へ合せられ、大は天下

委頓

進止  
秉燭

有識の心を汲取らせられ、小は登母子慈孝の私を御憐愍遊ばされ、相公の御仁政至らぬ限もなく、天下感悦し奉り候様願ひ奉り候事に御座候。この意、貴兄御勸考、苦しからずとおぼし候はば、御侍坐の節、何卒竊かに尊聽に達せられ候事は、相叶ふまじく候や。廿日以後、この事にて、度々勉強他出にて委頓仕り候處、廿六日夜、竟に霍亂と變じ、夢寐の如く終に未だ醒めず候へども、昨日城中より來り候もの有之、尙又、風聞太急の由申候に付、勉強秉燭相認め、内々申上試み候。宜しく御進止下さるべく願ひ奉り候。頓首再拜。

言水 池西氏、奈良に住む、松江重頼の弟、享保十七年歿、年七十三。  
 几董 名は高井小八、京都の人、寛政元年歿、年四十九。  
 召波 黒柳氏、京都の人、寛政元年歿、年四十九。  
 大魯 吉分氏、大阪の俳人、安永七年歿。  
 蓼太 大島氏、本姓吉川氏、江戸の人、天明七年歿。  
 曉臺 加藤氏、名古屋の人、寛政十四年歿、年六十一。  
 関更 高桑氏、加賀

一四 木 枯

木枯の果はありけり海の音  
 木枯や何に世わたる家五軒  
 晴る、日や雲を貫く雪の富士  
 冬がれの里を見おろす峠かな  
 山風や霰ふきこむ馬の耳  
 ともし火を見れば風あり夜の雪  
 風はやく二つにわれて群千鳥  
 枯蘆の日に日に折れて流れけり  
 降りやむや雪に灯ともる峰の寺  
 鉢浅く水仙の根の氷りつく

言 水  
 燕 村  
 几 董  
 召 波  
 大 魯  
 蓼 太  
 曉 臺  
 関 更  
 子 規  
 碧 梧 桐

山 路



(横山大観筆)

金澤の人、寛政十一年、  
 規、年七十三、  
 子規、本名正岡常規、明治三十五年、  
 碧梧桐、本名河東兼五郎、伊豫松山人、  
 室鳩巢、江戸時代の儒者、江戸の人、名は直清、初名は直清、初名は直清、初名は直清、  
 白駒の波、七十九年、  
 黄金の術、  
 老疾の董生、  
 昔の董生、  
 不識、  
 下、  
 書、  
 董仲舒、  
 程朱の道、  
 鄒魯の風、  
 邯鄲の歩

一五 壬子試筆の詞

室鳩巢

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎ易く、衰病日に犯して、黄金の術成り難し。されば、犬馬の齡、これまであるべしともおもはざりしが、いつしか、老の波より來て、今年七十あまり五つの春にもなりぬ。あまさへ、近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝに、昔の董生を學ぶとにあらねども、この三とせ、春の園を窺ふこともかなはねば、閨の中ながら梢に傳ふ鶯の音に、殘の夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔をしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學の窓に年を経るかひありて、程朱の道に従ひて、鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて、邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寐覺も慰みぬべき。



富貴は浮べる雲  
不義而富且貴、於我如浮雲、(論語)  
禍福は糾へる繩、夫禍之與福、分、何異、糾、(文選)  
三綱

風教  
蚘蚌の云々  
蚘蚌撼大樹、可レ笑自不レ量、(韓退之)  
精衛云々  
發鳩之山、有レ鳥、曰、精衛、常取西山之木石、以填東海、(山海經)

さても、多くの年月を経て、世の移り變る有様を考ふるに、盛衰榮枯互にゆきかふをば夢とやいはん現とやいはん。まことに、富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如しといへるに何か違ふことあるべき。中に、たゞ、わが聖人の立てたまへる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、こればかりは變ることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。

然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく、利欲にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もとより、いやしき身にて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに、蚘蚌の樹を撼かし、精衛が海を填むるに似たるべし。さはいへど、わが儒分内のことなれば、これを度外に置くべきにもあらず。

こそ……………ね

曲學阿世

前修

おのがじし

ならし

よりて思ふに、世に、老師宿儒と稱する人の、好んで異説をほしいまゝにし、又は、他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこそうけられね。たゞ、務めて、新奇を競うて俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口をしきことなり。古人の所謂曲學阿世とは、是等をいふなるべし。

よし、人はさもあらばあれ、よし、風俗は昔にあらざるなりぬとも、わが身一つはもとの如く、仁義の道をまもり、たゞ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて、儒となりししるしともいふべけれ。然るに、あらたまの春のはじめとて、人は、皆、おのがじし身の福を萬代と祝ふ中に、我は、ただ、五常の道に心をよせて、いづもかはらずめでたきものはこの道なりとて、かくなん筆を試みるものならし。

(駁臺雜話)

70  
118

一六 宇治川先陣

さる程に、熊谷直實大音揚げていひけるは、抑、この宇治河固  
 めたる輩、木曾殿の入魂の郎黨にはよもあらず。一旦、附き従  
 ひたる人どもにこそあるらめ。命は惜しき習なり。詮なき  
 合戦に與力して、大事の命失ふな。落ちば助けん」といふ儘に、  
 引取り引取り放つ矢に、木曾殿の郎黨に、藤太左衛門尉兼助と  
 いふ者、逆さまに射落されけり。之を始として、水練の者あら  
 ば防矢射んとて、五人進み寄つて散々に射ければ、多くの郎黨  
 或は手負ひ或は討たれけり。その間に、佐々木が郎黨に、常陸  
 の國の住人鹿島與一とて無雙の水練あり。鎧脱ぎ置き、はだ  
 ばかまをかき、腰には鎌をさし、手には熊手もちて、河の底に

入魂

五人  
平山季重・佐  
々木綱・熊谷  
直實・子息直  
家

はだばかま

入り、良久しく沈みくぐりて、亂杙逆茂木引き落し大綱小綱切  
 り棄てけり。實の器量と見えたりけり。されども、未だ河を  
 渡す者はなし、如何あるべきと評定様々なりけるに、畠山庄司  
 次郎重忠進み出でて申しけるは、事新し、この河は近江の湖の  
 末、今始めて出来たる河にあらず。春立つ日影の習にて、細谷  
 川の氷解け、比良の高嶺の雪消えて、水の嵩は増せども、水の減  
 ずることあるべからず。足利又太郎忠綱も、高倉宮の御謀叛  
 の御時は、渡せばこそ渡しけり。鎌倉殿の御前にて、さしも評  
 定の有りしは是ぞかし。始めて驚くべき事に非ず。かねて  
 の馬用意そのことなり。重忠渡して見参に入れん」といふ處  
 に、平等院の小嶋が崎より、武者二騎かけ出でたり。梶原源太  
 と佐々木四郎となり。

木蘭地  
三枚冑  
小中黒

景季が装束には、木蘭地の直垂に、黒革緘の鎧に、三枚冑の緒を締め、滋籐の弓を中を取り、二十四さしたる小中黒の矢負ひ、練鐔の太刀佩いて、鎌倉殿より賜はりたる磨墨といふ名馬に、

小櫻を黄に返したる鎧

滋籐 黒塗の鞍置いて騎りたり。

笛籐

小中黒 高綱は、褐の直垂に、小櫻を黄に返したる鎧に、鍬形打

いし打

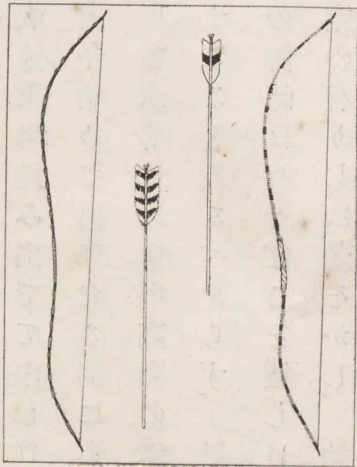
矢羽 中取り、二十四さしたるいし打の征矢、頭高に負ひ、

噴物造

笛籐 打の征矢、頭高に負ひ、

黄覆輪

物造の太刀佩いて、是も、鎌倉殿より賜はりたる生唆に、黄覆輪の鞍置きてぞ騎りたりける。誰か先陣と見る處に、源太颯とうち入りて、遙かに先だちけ



笛籐

矢羽

いし打

小中黒

滋籐

逸物  
矩に渡す

り。高綱いひけるは、如何に源太殿御邊と高綱との外に人なれば、かく申す。殿の馬の腹帯は、以ての外に、糞つて見ゆるものかな。此の河は、大事の渡なり。河中にて鞍踏み返して敵に笑はれ給ふな。といひければ、さもあらんと思ひて、馬を駐め、鐙踏ん張り立ち上り、弓の弦を口に噉へ、腹帯を解いて、引き締め引き締めしける間に、高綱さつと打渡して、二段ばかり先だちたり。源太、たばかられけり、と、安からず思ひて、是も打浸して渡しけるが、馬の脚綱にかゝりて、思ふ様にも渡されず。高綱は、倔強の逸物にも乗りたれば、宇治川は、やしと雖も、淵瀬をいはずさざめかして、矩に渡し、向の岸近くなりて、高綱が馬綱に懸つて脚をさと歩み除きければ、元より期することなれば、太刀を抜き、大綱小綱三筋さと切り流し、向の岸へ打上り、鐙

踏ん張り弓杖ついて、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣渡したりや。」と名乗りも果てぬに、梶原源太も流れ渡りに上りにけり。源太、佐々木鎌倉へ早馬を立つ。何れも、劣らじ負けじと馳せて行く。源太の早馬先だちたりけるが、如何したりけん、足柄の中山にて、高綱が早馬先だちぬ。三日と申すに馳せ着いて、高綱、宇治川の先陣と申したり。同時に、梶原が使亦來つて、景季先陣と申しけり。右兵衛佐殿は、安立新三郎清恒を召して、佐々木梶原生きたりや。」と問ひ給へば、共に候。」と申す。その後は、尋ね給ふことなし。後日の注進に、宇治川の先陣は高綱と注されたりけるを見給うてこそ、言と心と相違なしとはのたまひけれ。

(源平盛衰記)

注す

黒田鵬心

國民美術協會  
理事名は八  
信、明治十八  
年、東京に生  
る、東京帝國  
大學出身

一七 日本美術の特質

黒田鵬心

美術は人の精神の情的發現である、而して、國民性とは一國民の團體的精神のことであるから、一國の美術はその國民性の發現だといふことが出来る。これは、理窟の上からも云ひ得るが、事實に於ても、古今東西の國民性または民族性とその有する美術とを比べると、明かに證據立てることが出来る。例へば、瀟洒、淡泊を愛することは、日本の國民性の一つであるが、それは建築の上に、古代の神社建築、近世の茶室建築として現はれてゐる。

國民性は、古今を通じた一種の縦の潮流のやうなものであるが、いづれの國でも、時代時代に随つて、また違つた團體的精

類型

神を生じ、一つの時代に於ては、それが數國を通じて同じ傾向を帯びることがある。即ち、一種の横の潮流のやうなもので、これを時代精神または時代思想と名づける。美術はまたこの時代精神の發現でもある、例へば桃山時代の豪華の風は、當時の建築の上に、雄大な裝飾となつて現はれてゐる。

日本の美術、即ち建築彫刻繪畫工藝美術は、その種類により、又、時代により、各、特色を異にしてゐるが、この四種の美術を通じ、太古から現在までを含む所の日本美術通有の特質を考へることが出来る。余はこれを凡そ下の五點に纏めて見た。

それは、第一に植物的であること、第二に自然物的であること、第三に理想的であること、第四に類型的であること、第五に裝飾的であることである。



光 琳 筆

第一に擧げた植物的といふのは、物質的材料から日本美術を見る時は、最も著しい特色である。而して、美術の表現が、その物質的材料に限定されることの多いのを思へば、物質的材料の特色は、やがて表現の特色と密接な關係にあることがわかる。

まづ建築を見るに、その材料は殆ど全部木材である。木造建築でこれほど發達した

沖澹

例は、日本建築の外にない。次ぎに彫刻も各時代を通じて木材を材料としたものが多い、繪畫の紙は植物から造るものもあるし、絹も植物性が多い。工藝美術は、木工は勿論、非常に發達した漆工も、植物材料に依るものである。而して此等の植物的材料を用ひる結果、その美は、優美・緘美・雅美となり、瀟洒・淡泊・沖澹・幽寂・輕快・飄逸といふやうな表現を呈する。此等の特色を總括して、植物的と云つたのである。

第二に、自然物的といふのは、換言すれば、非人事的といふことである。要するに、自然及び自然物と接觸してゐる所から來る特色である。まづ、建築に於ては、建物とその周圍の自然とを結合調和せしめることが、日本建築の特色となつてゐる。彫刻は、その性質上、必ずしも自然物を題材とすることも出來

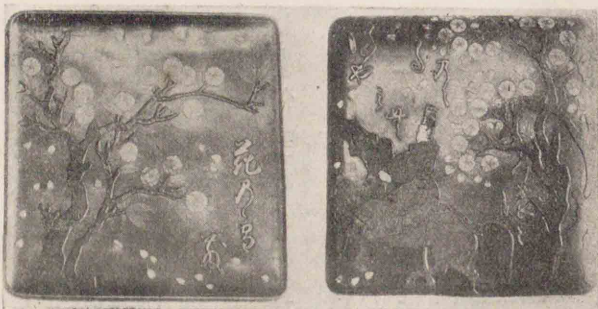
ないが、人事は甚だ鮮い。繪畫に於ては、その題材を多く自然の風景や花鳥に採つてゐる。歴史畫・人物畫・風俗畫なども澤山あるが、その歴史上の事件・人物・風俗などの觀方が、やはり自然の風景や花鳥を觀る心持であるのが多い。工藝美術も、その模様は多く自然物から出てゐる。而して、この第二の特色は、第一の植物的といふのと表裏の關係がある。前に物質的材料の方から植物的と云つたのを、こゝでは美術の題材として使つて自然物的と云つたのだから、同じものを兩面から觀たことになるのである。

第三に、理想的といふのは、第二の自然物的といふ特色と矛盾するやうであるが、決してさうでない。この特色を最もよく示すものとして、繪畫を觀るに、その題材は多く自然物を採

るけれども、これを描くに當つては、線條を重んじ、遠近法や陰影法を極端に無視し、出來上つたものは自然を理想化したものとなつてゐる。個々の人物などの最も活躍してゐる風俗畫と雖も、全體として觀る時は、遂に非現實的理想畫たるものが多い。自然物を題材としたものでさへ此の如くであるから、元來理想的な宗教的題材の繪に至つては、益々理想的といふ特色を明かにする。彫刻に人物の像が尠くて、佛像神像の多いことも、またこの特色の著しい例とすることが出来る。

第四は、類型的といふことであるが、これは第三の理想的といふ特色と密接な關係があつて、理想的であれば隨つて類型的になるのである。例へば、繪畫に於て、題材たる自然物を理想化する時は、甲の風景も乙の風景も相似たものとなり、丙丁

佛舍利  
繪卷物



光琳 模様

の風景畫に至つては、殆ど同じ型のものとなつて了ふ。彫刻に於ては、題材が元來理想的の佛菩薩であるから、その類型的になるのも當然である。建築に於ても、極少數の例外を除いては悉く類型的のものである。

第五の裝飾的といふことは種々の點からいひ得る。まづ自由美術に裝飾的分子の多いことが著しい。建築にしても、塔婆の如きは、元來は佛舍利を納める所さへあれば好いものを、三重にしたり五重にしたり七重にしたりするのは、全く裝飾的分子を多くするためである。繪畫にしても、繪卷物

象眼

や花鳥を題材としたものは裝飾的分子が多く、その最も著しい例は光琳派のものである。次には、甲の自由美術のために、乙丙丁の自由美術を裝飾とすることが多い。例へば、建築を裝飾するがために、彫刻や繪畫を多く用ひる、尤も、これは他國にも隨分行はれてゐることではあるが、それから、その次には、裝飾美術の發達してゐることである。殊に漆工・七寶・象眼などに至つては、意匠手法共に非常に發達してゐる。以上三點に於て、裝飾的といふことは日本美術の最も主なる特色の一つとすることが出来るとおもふ。

(日本美術史講話)

一八 四季

卜部兼好

卜部兼好  
吉田兼好とも  
いふ、正平六  
九年没、年六十

あめれ

こゝのへにほふ  
とならばむめの花  
やどのこそまに  
春をしらせよ

けしきだつ  
ほどこそあれ

あ、乃、小、小

と、り、ひ、び、の、糸

や、と、の、ま、ま、小

ま、ま、ま、ま、ま、ま

兼好法師筆蹟

をりふしのうつりかはるこそ物毎にあはれなれ。ものもの  
あはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるもの  
のにて、今ひとときは心もうき立つ  
ものは、春の景色にこそあめれ。  
鳥の聲なども、ことの外に春めき  
て、のどやかなる日影に、垣根の草  
萌え出づる頃より、や、春深く霞

みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、をりしも  
雨風うちつづきて、心あわたしく散り過ぎぬ。青葉になり  
ゆくまで、よろづに、唯、心のみぞなやます。花橘は名にこそ



春は花の散り  
一季に咲くゆかり  
もつちわれは  
林をまろり  
藤人知事

灌佛の頃  
四月八日に行  
祭の頃  
賀茂の祭。四  
月の中の西の  
日に行はる。  
水鶏  
夕顔

六月祓  
さつき待つ花柳の  
春まかけは  
袖の香をさする  
なまめかし  
わさ田  
ほしきこと  
さつき待つ花柳の  
あやめ草  
心もすうかな

おへれなほ梅の匂にぞいにしへのこともたちかへりこひし  
うおもひ出でらる。山吹の清げに藤のおぼつかなきさま  
したるすべておもひすてがたきこと多し。

灌佛の頃祭の頃若葉の梢すびしげに茂りゆくほどこそ世  
のあはれも人のこひしさもまされと人の仰せられしこそげ  
にさるものなれ。五月菖蒲葺く頃早苗とる頃水鶏のたたく  
などこゝろぼそからぬかは。六月の頃あやしき家に夕顔の  
しろく見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またを  
かし。

たなばたまつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒にな  
る程雁鳴きて来る頃萩の下葉色づく程わさ田刈りほすなど  
とりあつめたることは秋のみぞ多かる。又野分のあしたこ

おぼしきこと  
おぼしきこと  
いほぬげに  
ぞ腹ふくる  
こちしけ  
こそ昔のま  
は物いばま  
ほしくなれ  
ばあなをほ  
りてはいひ  
れ待りけめ  
い  
あちきなし  
かいやる

御佛名  
荷前の使

そをかしけれ。いひつゞくれば皆源氏物語枕草子などにこ  
とふりにたれどおなじことまた今更にいはいはじにもあらず  
おぼしきこといはぬは腹ふくるわざなれば筆にまかせつ  
つあちきなきすさびにてかいやりすつべきものなれば人の  
見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ秋にはをさをさを劣るまじけれ。江の  
草に紅葉の散りとままりて霜いと白うおけるあした遣水よ  
り煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて人毎にいそぎ  
あへる頃ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして見  
る人もなき月の寒けくすめる二十日あまりの空こそ心ほそ  
きものなれ。御佛名荷前の使たつなどぞあはれにやんごと  
なき。公事もしげく春のいそぎにとりかさねて催し行は

追儼  
四方拜

るゝさまざまいみじきや。追儼より四方拜につゞくこそおも  
 しろけれ。つごもりの夜のいたうくらきに松どもともして、  
 夜半すぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらんこ  
 とごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすが  
 に音なくなりぬるこそ、年のなごりもこゝろぼそけれ。  
 人の来る夜とて、魂まつるわざは、この頃、都にはなきを、あづま  
 の方には、なほすることにてありしこそ、あはれなりしか。  
 かくて、あけゆく空の景色、昨日にかはりたりとは見えねど、  
 ひきかへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松たてわた  
 して、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

(徒然草)

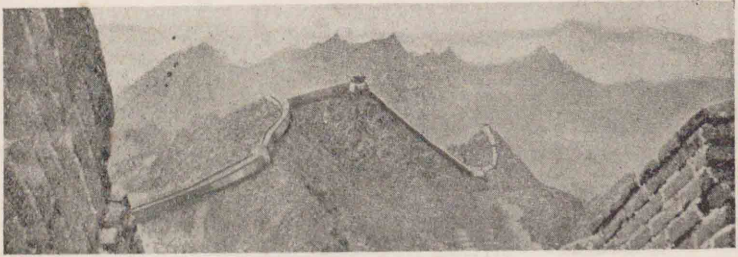
こそ  
しか

土井晩翠

詩人、名は林  
 吉、明治四年  
 仙臺に生る、  
 東京帝大英文  
 科出身、第二  
 高等學校教  
 授。

征驂

平蕪



城 長 里 萬

一九 萬里の長城

土井晩翠

生ける歴史か、積り來し齡は高し、二千年。  
 影は萬里の空に入る、名も長城の壁の上、  
 落日低く雲淡く、關山みすく、暮れんと  
 す。  
 征驂 恨み留りて、遊子俯仰の影一つ。  
 絶域花は稀ながら、平蕪の緑今深し。  
 春乾坤に回りては、空ことごとく霞みゆ  
 く。



萬里長城

天地の色は老いずして、人間の世は移ら  
 ふを、  
 歌ふか高く大空に、姿は見えぬ夕雲雀。  
 嗚呼、跡ふりぬ、人去りぬ、歳は流れぬ、千載  
 の  
 昔に返り、何の地か、今秦皇の覇圖を見ん。  
 殘壘破壁聲もなし、恨も暗し夕まぐれ、  
 春朦朧のたゞ中に、俯仰遊子の影一つ。

(曉鐘)

法皇  
後白河法皇。

二〇 大原御幸

御幸なる。  
 後徳大寺  
 左大臣藤原實  
 定  
 花山院  
 大納言藤原兼  
 雅  
 土御門  
 權中納言源通  
 親。

法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の間居の御住居、御覽ぜまほしく思しめされけれども、二月・三月の程は、嵐烈しく餘寒も未だ盡きず、峯の白雪絶えやらで、谷のつらゝも打融けず。かくて、春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇、夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には、後徳大寺・花山院・土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。  
 遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり、青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるゝ。卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を別け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、

亂る

うら紫

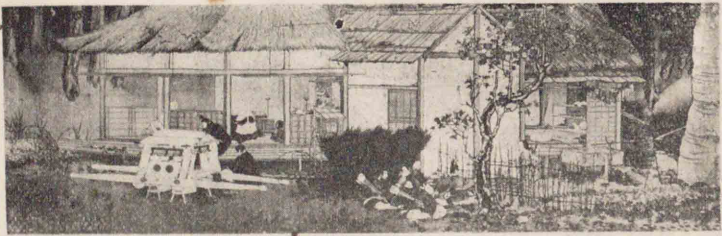


大原御幸

御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思しめし知られてあはれなり。西の山の麓に一字の御堂あり、即ち、寂光院是なり。古う造りなせる泉水、木立、よしある様の處なり。藁破れては、霧、不斷の香を焼き、屏落ちては、月、常住の燈を挑ぐ。とも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸

\*此の歌千載集に  
し、みこにおは  
し、ましける  
時、鳥羽殿に  
渡らせ給へり  
ける頃、池上  
花といへる心  
をよませ給う  
ける一と詞書  
あり。

瓢箪屢空、草  
滋、藜、深、淵、之、巷、雨  
藜、藜、深、淵、之、巷、雨  
濕、原、憲、之、樞、橋  
本、朝、文、粹、ま、橋  
直、幹、申、文、ま、橋  
た、和、漢、朗、詠  
集、にも、出、づ、



大原御幸

を待顔なり。法皇これを叡覽あつて、かうぞあそばされける。  
池水に汀の櫻散りしきて  
波の花こそさかりなりけれ  
ふりにける岩の絶間より、落ち來る水の音さへ、ゆゑよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし。さて、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には、蔦、朝顔はひかゝり、しのぶまじりの忘草、瓢箪屢空し、草、顔淵が巷に滋し。藜、藜、深く鎖せり、雨、原憲が樞を濕す。ともいひつべし。杉の茸目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、も

いざさ小笹  
ませ垣  
つま木  
まさきのかづら

五戒  
不殺生戒  
不盜戒  
不婬戒  
不飲酒戒  
不妄語戒  
不惡口戒  
不綺語戒  
不貪戒  
不瞋戒  
不癡戒

る月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山前は野邊、いざさを笹に風さわぎ、世にたへぬ身のならひとて、うきふし繁き竹柱、都の方の音信は、間遠に結へるませ垣や、纒かに言とふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これ等が音信ならでは、まさきのかづら、青つづら、くる人稀なる處なり。

法皇、人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝありて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院は何處へ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや、御いたはしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報つきさせたまふに

なじかは

伽耶城  
今の伽耶市  
佛成道の遺跡  
なるこの市  
は、南方十哩の  
檀特山のあり  
また彈多落迦  
山ともいふ  
古印度の西北  
名健駄羅國の山  
正覺

いとほしみ

よつて、今、かゝる御目を御覽せられ候にこそ、捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候べき。むかし、悉達太子は、十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木葉を連ねて肌をかくし、峯に上つて薪を採り、谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の功によつて、終に成道正覺し給ひき。」とぞ申しける。この尼の有様を御覽すれば、身には絹布の別も見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有様にても、かやうの事を申す不思議さよとおぼしめして、抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめざめと泣きて、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙をおさへて、申すにつけて、憚り覚え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊の二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふ

來迎の三尊  
善導和尚  
唐僧、道綽禪師に就いて淨土教を究めて淨寂す。永隆二年(一一三二)一三三四

九帖の御書  
善導所述の佛典。

淨名居士  
維摩。毗舍離國の長者にして釋迦とす。代を同じうす。

につきても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押當てて、忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇「げにも、汝は阿波の内侍にてこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、唯夢とのみこそ思しめせ。」とて、御涙せきあへ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたるに、申すこそ理なれ。」とぞ各、感じあはれける。

さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて、叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚、並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ち上る。かの淨名居士の、方丈の室の内に三萬二千の牀をならべ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて所々におされたり。

おす

さて、傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾などかけられたり。さしも本朝漢土の妙なる類、數をつくしし綾羅錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。やあつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩の岨路を傳ひつゝ、下り煩ひたる様なりけり。法皇「あれは如何なる者ぞ。」と仰せければ、老尼、涙をおさへて、花筐臂にかけ、岩躑躅取り具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。つま

岨路

花筐

本に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條大納言邦綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡されける。

女院は、世を厭ふ御習とはいひながら、今かゝる有様を見え参らせんずらんは、づかしさよ消えも失せばやと、おぼしめせどもかひぞなき。宵々ごとの関伽の水、むすぶ袂もしをるるに、曉起の袖の上、山路の露も繁くして、しぼりやかねさせたまひけん、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる所に、内侍の尼参りつゝ、花筐をばたまはりけり。

(平家物語)

関伽

明和四年  
(二四二七)

致仕

御内人

二一 曲亭馬琴 その一

曲亭馬琴は、氏を瀧澤、名を解といひ、著作堂主人、玄同陳人、養笠翁等の別號あり。明和四年、江戸に生れぬ。



曲亭馬琴

馬琴の父は、武州川越藩の別家なる志多美の松平家に仕へしが、馬琴の幼時故ありて致仕し、尋いで病歿せしかば、長兄左馬太郎家を嗣ぎ、更に、江戸の旗本戸田大學頭の御内人となりぬ。家もとより富めるにあらねば、馬琴また自ら衣食の資を

剛愎 齷齪

求めんが爲に、諸家に武家奉公をなししも、剛愎の質にて、仕途

に齷齪たるを喜ばず、毎に幾ばくもなくして辭し去りぬ。

彼は累世の嗜好を受けて、少時

より心を俳諧に傾け、又頗る讀書

癖ありて、眼に觸るゝかぎり、何く

れとなく讀み漁りて、こよなく興

趣を覺ゆるまゝに、長兄の主人に

隨ひて甲府に赴き、家母またみま

かりて身を寄するに處なきに及

び、當時戲作界の隆運と自己の天

稟とに省み、乃ち適きて、指導と扶掖とを盛名噴々として斯界



紙 表 黄

に匹ぶものなかりし山東京傳に請ひぬ。馬琴、これより京傳

の庇護を得、京傳

門人大榮山人て

ふ署名の下に、始

めてその黄表紙

の處女作を出せ

り。これ、寛政二

年のことにして、

彼が二十四歳の時なりき。

その後、彼は、神奈川なる

しるべを便りて、暫く其處

には、食ふ生活を送りしも、流離幾月、また江戸に還りぬ。こ



黄表紙 處女作

山東京傳補綴  
馬琴、全傳、單紙、卷之一  
...



地本

たづき

草雙紙  
讀本

腹笥  
籍甚

梓行

の時、彼は再び京傳に倚りてその家に寓せしが、やがて、地本（居候）問屋蔦屋の番頭となりて業務を執り、傍ら、文筆の事に従ひぬ。然れども、彼は久しからずして蔦屋を去り、飯田町の小商人の家に入婿となれり、彼は藥を販ぎ、又、手習の師匠などして、活計のたづきとせり。しかも、著作は固より之を止めず、用を節しては書を購ひ、暇をはかりては、かつ讀みかつ作り、いさゝかも怠ることなかりき。

かくすること多年、彼は數々の作を出し、草雙紙（シラカゲイ）に讀本（ヨミホン）に、世評の好かりしもまた少なからざりき。腹笥（ハラタビ）漸く富み、筆致（フデカタ）漸く熟して、文名は東西に籍甚しぬ。文化の頃となりては、彼の傑作椿説弓張月の成るあり、大作南總里見八犬傳の次第に公にせらるゝあり、その他の小作、數を知らず梓行（シラカゲイ）せらるゝあり、

家道

渴仰

侯伯（大も）も彼を知り走卒も彼を記し、都鄙競うて次回の出版を待てば、書賈（シヤウ）は争うてその稿を求め、さばかり盛名ありし京傳すら、をさく、顔色なきに至れり。まして、文化十三年京傳が歿せし後は、讀本作者としての彼の聲望は、宛ら、櫻花春を擅（ウチカ）にして、桃紅李白、また、その芳を誇る能はざるの觀ありき。

かくて、文政元年、彼の男宗伯（おとすけ）が、居を神田同朋町に卜して、醫を業とするや、彼また居を此に移して、得意の筆をつゞけぬ。同三年には、宗伯、松前侯の御抱醫師となりて、家道（イカド）稍裕かになりもてゆけば、珍書奇籍も益、蒐り、數十櫃の圖書を左右にしつゝ、彼はその創作と考證（コウシヤウ）とに耽りぬ。その作は愈、歡迎せられ、彼の名聲は一層轟きぬ。曲亭翁の稱は、賞賛より進みて、尊敬をもて呼ばれぬ、否、或る者は渴仰（カクオウ）をもてたゞへぬ。

嘉永元年  
(二五〇八)

225  
225  
225

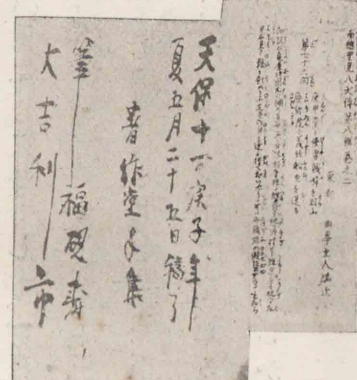
さはれ、彼の晩年は、餘りに幸多きものにはあらざりき。彼は、天保五年頃より眼疾を患ひ、同六年には、杖とも頼みし宗伯を先だて、同八年には、婿清右衛門死し、その翌々年より、兩眼共に殆ど物を見ざるに至り、十一年には、全く明を失し、十二年には、老妻の喪にさへ會ひぬ。しかも、彼は、この年即ち七十五歳の時を以て八犬傳を大成し、一百有六冊の長篇を了へしが、後數年を経て、嘉永元年八十二歳にして逝けり。

二二 曲亭馬琴 その二

寛政より嘉永に至るまで凡そ六十年、馬琴は、この間、銳意（身心）その著作に従事して、一日も筆を休めしことなく、生涯の著述、小説、隨筆、雜著を併せて、三百數十部、一千數百冊あり。就中、八犬傳は、稿を文化十一年正月に起し、二十八年を費して、天保十二年八月、その完成を見るを得たり。二十八星霜中、彼は幾多の辛酸を嘗めたり。しかも、彼が晩年眼疾を患ふるや、字を寫すに苦しみ、漸次稿本の文字を大にして、後には半紙半枚に四五行とし、辿る／＼も草せしかど、終には兩眼共に盲ひて如何とも爲む術なく、文溪堂及貸本屋などいふ者さへ聞き知りて、皆うれはしく思はぬはなく、爲に代寫すべき人を索むるに、意に

机心 幫助

稱ふさる者のあるべくも覺えず。孫興邦は尙乳臭机心失せず、且武藝を好める本姓なれば、かかる幫助になるべくもあらず、彼が母は、人竝ににじり書もすれば、教へて代寫せさせばやと、



八犬傳原稿

やうやうに思ひかへしつ。第一百七十七回の中より代筆せさせて、一字毎に字を教へ、一句毎に假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗字だに知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名遣氏爾乎波だにも辨へず、偏傍すら心得ざるに、只言語をのみもて教へて、寫さする吾が苦心はいふべくもあらず。まして、教を承けてかく者は、夢路を辿る心地して、果は打ち泣くめり。」と八犬傳に附記して、その實況を述べ

雅言

滂沱

たるを讀めば、覺えず同情の涙滂沱たるものあり。

試みに、彼の日記と親友に與へし書簡とを檢せよ。天保五年三月六日の條に、今日より八犬傳九輯壹の卷本文九十三回のはじめ二十二丁目一丁稿之、筆溢り候に付、終日にして僅かに壹丁稿之。」とあるが如き、同三月廿日の條に、「感冒再感不食に候へども、勤めて八犬傳九十五回の中三丁稿之、夕方より惡寒甚しく候に付、干饅飽買取調理致させ三椀食之、薄暮よりかむり就枕。」といへるがごとき、これ、彼の六十八歳の老齡を以て、種々の艱難困苦と闘ひつゝ、いかに、畢生かの大作にいそしみしかを見るに足るべきものならずや。また、その友人に寄せたる書簡に、

惡寒

天保十一年正月八日付、野村篁齋宛に宛てたる書簡

野生唯今の弊屋は茅葺にて、所謂伏屋に候へば、晴天とい

看官

へども薄暗く候。まして雨天には、老眼にいよ／＼不便也。これにより、舊冬より、今以て、日々座敷の縁端へ机を置き、小蒲團を敷かせ、終日其處にて辨用致候故、あと先つかへ、縁の透間より寒風を吹き上げ、脚あしいたみ膝ひえ堪へかね候を、忍び／＼筆を執り候。然るを世の看官は、炬燵に足をさし入れ、仰臥しつゝ、讀み見て、よいのわるいといはるゝ也。果報の厚薄、世にはかゝる事多かり。吾のみならねど、世路艱難、大息の外無之候。といへるが如き、又、眼力の日に衰へ行くを嘆きて、八犬傳九輯三十八以下、二月中旬筆を起し候處、先便貴意を得候如く、老衰眼去冬十二月中旬以來、月々日々にかすみ多くなり候に付、唯手探りにて筆を執り候へども、讀み

同年四月十一日付、手探りにて記せるもの。

かへし候事は、一行も致し難く候。稿半にして外に用事有之、筆を擱き、程經てまた筆を執らんとするに、讀めず候間、急に媳婦あんなを呼び寄せ讀ませ候て、その後を書きつぎ候事に御座候。それ故、つけ假名も本文と同時につけ申さずては、後にて附け候事なりがたく候。即時に一行づつ附け候假名すらも、取違へ候事多し。如此に候へば、文を補ひ候事などは一向に出來かね候。それも晝後に至り候ては、眼氣も氣力も疲れ果て候て、苦しく堪へ難く候間、そのまゝに倒れて氣力を養ひ候故に、六行の大字稿本にして、一日に何ばかりも出來ず候。此分にては、來年は書き候事も成りかね候はんか。これには大よわりにて、唯當惑此事のみに候へども、今更せん方無之候。返す返

同年六月六日  
付、代筆にて  
認めたるも  
の。

すも御憐察可被成下候。といへるが如き、又微かに残りし視力さへ、竟に絶え果てて、當春二三月頃迄は、唯今より少しは眼力残り居り候間、畫稿などもかなりに出來候へども、此節に至り候ては、人の首をかき候ても、その首見えぬ候に付、手足をつけ候事もなりかね、甚だ困り候事に御座候。畫は書と違ひ筆をはなし、形を爲し候ものゆゑ、筆の當て所見え兼ね候ては、何分にも出來難く候。稿本も右同斷にて、度々讀みかへし補ひ候事もなりかね候間、はじめ書きおろし候まゝにて、一返讀ませ、之を聞き、誤脱を補ひ候のみに候。板下校合も右同様にて、家内の者に讀ませ、これを聞き候て誤脱を補はせ候のみ。彫り立校合も右同様にて、定め

て誤多かるべく候。

と、代筆によりて悲境を敘せるが如き、一字一涙殆ど人をして卒讀に堪へざらしむるに非ずや。

嗚呼、彼が博覽にして強記なる、材を取ること縦横なるものありき。しかも、往々怪奇にして自然ならず、又、徒らに博にして約を失せし恨なき能はざるなり。彼が詞藻の豊麗なる、文を過ぎて、技巧の痕寧ろ厭ふべきものなき能はざるなり。彼が構想の雄大にして綿密なる、宛ら、巍然たる殿堂の一楹苟もせざるが如きものありき。しかも、屢、煩縛に流れて、誇衒眉を擧むべきものなき能はざるなり。尙、その勸善懲惡の主義や、因果應報の教訓や、こちたくわざとがましく、頓に興味をして

煩縛  
誇衒

因果應報

索然  
脚色  
粉本

翻案

跟隨

跟隨

磅礪

好尚

索然たらしむるものなき能はざるなり。又、その脚色や例へば、水滸傳を粉本として八犬傳を作りしが如く、八郎御曹司の物語を材料として弓張月を著ししが如く、多くは支那小説又は我が傳説等の翻案にかかり、獨創の才に乏しきの憾なき能はざるなり。然れども彼が有せる如上幾多の長所は、此等の缺點を以てするも到底埋没すべからず。しかも、意志の剛健なる、精力の偉大なる、容易く常人の跟隨を許さざる所にして、又、自ら道義を以て高く標置するの氣槩、遙かに他の戲作者の儕輩を超ゆるものあり。宜なり、儒教思想の磅礪せる社會にありて、卑淺にして單純なるものに飽きし當代讀者間の好尚に投じ、以て非常なる嘆賞を博せしこと。

塞翁が馬

親  
犬塚番作

絆

二三 芳流閣

瀧澤馬琴

禍福は絆なはふなは纏のごとく、人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは想へども、豫てより誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心にしめつ、身につけつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々古河へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで、我が身を劈く響とぞなりし、憾を爰に釋く由もなく、絆急にして、意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切り開きて、芳流閣の屋の上に攀ぢ登れども、とにかくに、脱れ去るべき道の無けれ

ば其處に必死を極めたる心の中は如何なりけん、想ひやるだ  
にいと痛まし。

されば、また、犬飼現八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄  
舎に繋がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝ  
る捕手の役義、犬塚信乃を搦めよとて、愁ひに選み出されつ、他  
の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へ  
ども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は  
三重なり。その二重なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見  
れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は六月二十  
一日、昨日も今日も乾蒸のほてりわたれる敷瓦は、凸凹隙なく  
波に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る、流は名に  
負ふ坂東太郎、水際の舟楫を絶えて、進退既に谷りし敵にし

まぶし翳す

浮圖

\*足利成氏。

あれば、いかで、我、繋ぎ留めんと、颯の樹傳ふ如くさらくと、登  
り果てたる三重の屋根にはまぶし翳す由もなく、迭に透を窺



ひつゝ、睨まへあうて立つたる有  
様、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の  
ねらふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、郎等若黨圍  
繞せし床几に尻をうちかけて、勝  
負如何にと見上げたり。又、閣の  
東西には、腹卷したる許多の士卒、  
槍長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓  
杖突き立て、組んで落ちなば撃ち  
留めんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外の方

縣連  
墨氏が飛鷹  
魯般の雲梯

膳臣巴提便  
の人の  
飲明天皇の朝  
富田の三郎  
和田義盛の  
士。

は、縣連として杳かなる、河水繞りて砌を浸せば、たとひ信乃武  
事長け力衰へず、よく現八に捷ち得とも、墨氏が紙鳶を借らざ  
れば、虚空を翹るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上  
に下るべくもあらず、渠、鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩  
場であり。三寸息絶ゆれば、絆みな休まん。脱れ果てじと見  
えたりけり。

その時、信乃思ふやう、初重・二重の屋の上まで、追ひ登らんと  
せし兵等を、斫り落しつるその後は、絶えて近づく者もなきに、  
今唯一人登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。這奴はこれ  
膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか、また富田の三郎が鹿の  
角を裂く力あるか。遮莫一人の敵なり、引つ組んで刺し違へ、  
死するに難きことやはある、よき敵にこそ、目に物見せんと、血

さぶ

十手



嵩より落す

刀を袴の稜もておし拭ひ、高瀬のごとき方桴に、立つたる儘に  
寄するを待てば、現八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素よ  
り萬夫不當の敵なり。さりとても、搦め兼ねて、他の援を借る事  
あらば、獄舎の中よりこの役義に選み出されしかひもなし。  
搦め捕るとも撃たるとも、勝負を一時に決せんものと思ひ  
にければ、些も擬議せず、御詫さふと呼びかけて、持つたる十手  
を閃かし、飛ぶが如くに方桴の左の方より進み登りて、組まん  
とすれども寄せ附けず。心得たりと疾き太刀風に、撃つをは  
つしと受け留めて、拂へば透さずこむ刀尖を、支へて流す一上  
一下、迂る藁を踏みとめて、頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣ら  
ぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ  
勝負をわかざれば、廣庭なる主士卒は、手に汗握らざるもなく、



瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は、侮り難き現八が武藝に、敵を得たりけりと思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音かけ聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に闘ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と見るばかりなる、いと高き屋の棟にして死を争ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、現八は被籠の鎖、籠手のはづれを裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かではじめに淺痕を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場をはかりて撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、現八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間をのぞみて礮と打つ十手

爲體  
被籠

礮

利腕

を丁と受け留むる、信乃が刀は鏗際より、折れて遙かに飛び失せつ。現八得たりとむづと組むを、そがまゝ、左手にひきつけて、迭に利腕確と取り、振ぢ倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まる力足、これかれ齊しく踏み込らして、河邊の方へ轉々と、身をまるばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。高低險しき棧閣に、削りなしたる藁の勢、止るべくもあらざれど、迭に取つたる手を緩めず、幾千尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底にはいらで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、うちかさなりつどとうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水烟、纜ちやうと張り断りて、射る矢の如き早河のたゞ中へ吐き出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

(南總里見八犬傳)

法皇 後白河法皇。  
 みかど 後鳥羽天皇。  
 あまねき 御う  
 つくしみの  
 浪、やしまの  
 外まで流れ、  
 廣き御惠の  
 陰、筑波山の  
 麓よりもしげ  
 ておはしまし  
 (古今集)  
 筑波山  
 つくはねのこ  
 のもかのもの  
 陰はあれども  
 君が御かげに  
 ますかげはな  
 し。(古今集)

二四 おどろのした

建久三年三月十三日、法皇、かくれさせ給ひにし後は、みかど、  
 ひとへに、世をしろしめして、四方の海、波靜かに、吹く風も枝を  
 鳴さず、世治り民やすくして、あまねき御うつくしみの浪、秋津  
 洲の外までながれ、しげき御惠、筑波山のかげよりも深し。よ  
 るづの道々にあきらけくおはしませば、國に才ある人多く、昔  
 に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも、敷島の道なんすぐれさ  
 せたまひける。御歌、かずしらず人の口にある中にも、  
 奥山のおどろの下もふみわけて  
 道ある世ぞと人にしらせむ  
 と侍るこそ、まつりごと大事とおぼされけるほど、しるく聞え

て、いとみじくやんごとなくは侍れ。  
 まことに

建久九年正月、第一の御子四つになり給ふに、御位譲り申さ  
 せ給ひておりる給ふ。位におはしますこと十五年なりき。  
 今日明日、はたちばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事  
 なれども、よろづ所せき御有様よりは、なかなかやすらかに、御  
 幸など、御心のまゝならんとにや。世をしろしめすことは、今  
 もかはらねば、いとめでたし。鳥羽殿、白河殿なども修理せさ  
 せ給ひて、常に渡りすませ給へど、尙、又、水無瀬といふ處に、えも  
 いはずおもしろき院づくりして、しばし通ひおはしましたつ  
 つ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆく限り、世をひびかして、あ  
 そびをのみぞしたまふ。所がらもはるばると、川に臨める眺  
 望、いとおもしろくなん。元久の頃、詩に歌を合せられしにも、

白河殿 山城國愛宕  
 郡  
 水無瀬 攝津國三島  
 郡

元久の頃 土御門天皇の  
 御代の年號。

とりわきてこそは、  
 見わたせば山もとかすむ水無瀬川  
 ゆふべは秋となにおもひけむ  
 かやぶきの廊渡殿などはるばると、艶にをかしうせさせ給へり。御まへの山より瀧落されたる石のたゞずまひ、苔深きみ山木に枝さしかはしたる庭の小松も、實に實に千世をこめたる霞の洞なり。  
 (増鏡)

二五 落花の雪

落花の雪 またや見む交野のみ野の花のさ  
 雪ちる春のあ けぼの藤原俊  
 今集 藤原俊  
 紅葉の錦 朝まなき風の  
 山 の寒けれ  
 ば 紅葉の錦  
 き ぬ人ぞな  
 き (拾遺集)  
 藤原公任

時雨もいたく 白露も時雨も  
 いたくも は下葉残ら  
 り 色づきけ  
 り (古今集)  
 紀貫之

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寝となればも、うきに、恩愛のちぎり浅からぬ、我が故郷の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし九重の都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。  
 憂きをば留めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、未は山路を打出の濱沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき船の浮き沈み、駒もとゞろと踏みならず、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。  
 時雨もいたくも、山の下露に袖ぬれ

二五 落花の雪

111



\*南陽縣有甘谷、谷中水、甘美、上有大菊、山流下、谷中人家飲此水。上壽百二十三歲、其中百餘歲、七八十者、俗則爲天。(風俗通)

昔南陽縣菊水、  
今東海道菊河、  
宿西岸而終命、  
と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭・鶴首の船に乗り、詩歌・管絃の宴に侍りしことも、今は、二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、葛楓いとしげりて道もなし。昔、

大井川 駿河と遠江との界、  
龜山殿 山城國葛野郡離宮にありし

夢にも 駿河なるうつの山邊のうつゝに、伊勢物語)

上なき 富士の嶺の煙はなほも立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。(新古今集、藤原家隆)

元弘元年(一九九一)

業平の中將の住所をもとむとて東の方に下りしに、夢にも人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られた。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守にいと、涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や淺き舟浮けて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道行きなやむ足柄山の巔より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそつきたまひけれ。

(太平記)

綱島梁川  
思想家、備名は  
榮一郎、明治中  
の十人、明  
十五年、年三四

あなかま



二六 知己

綱島梁川

何人も他に知られたしの念あり。千萬人の徒なる喝采に動かざるものも、尙ほ其の一人の友に知られんことを求め、一代の聲譽をあなかまと聞きす。綱つるものも、尙ほ知己を千載の鳥後に期す。人は己を知るもの。梁なき生活に堪ふる能はず。曠川野を家とし、岩洞を居とし、世を無きものと住みわぶる室欲枯。禪の徒も、尙ほ中心いづこにか知己を求むる聲あり。人に知られんことを求めざるものも、尙ほ吾と同じ心持てらん何物

室欲  
枯禪  
一持てらん

主觀意識  
客觀意識

偶然性

にか知られんことを求むる、是れ實に人の社會的性情の自然の發動にあらずや。他に知られんことを求むといふ、而かも吾人は人の私心私情に知られんことを願はず、其の朗かなる公明の心に知られんことを願ふ。こゝに訴ふるものは、他の個人意識にあらずして、遍通意識なり、主觀意識にあらずして客觀意識なり。かくして、吾人が他に知らるゝを求むる心の眞實なればなるほど、其の知己なるべき人の標準を高くし醇化し、竟に其の一切の徒なる、うつろひ易く、搖き易き、一時性、偶然性を抽き盡くして、之を常恒不易、正確無謬の人となす。されば人に知らるゝを求むる心は、之を究竟すれば、やがて神に知らるゝを求むる心にあらずや。極めて實際氣質なりし孔子だに、知己を人以

上の境に求めて、知我者夫天乎と云へり。

吾人は神に何を知られんことを願ふか。吾が價值なり、眞情なり、眞要求なり。吾が價值に對する自信あり、吾が眞要求に對する自覺ありて、吾が心始めて神に嚮往す。神に知られんことを願ふものは、先づ吾に神に知らるゝ要求、自信無かるべからず、神を呼び求むるものは、先づ吾に神を呼び求むる權威無かるべからず。吾に抑遏すべからざる旺盛なる要求若くは自信ありて、則ち神を仰ぐの一念切なり。

吾自ら吾が價值要求を自覺自信す、この自覺と自信とありて、尙ほなんすれぞ神に知られんことを願ふぞ。答へて曰く、吾が價值要求の自覺自信といふものは、是れ吾が私心に媚びて得たる浮誇矜驕の沙汰にあらずして、吾が心の客觀的、遍通的

矜驕

懷疑  
眞摯

方面に訴へたる意識、一言すれば、吾が心之天に知られたるの意識なり。眞の自信は畢竟すれば、吾自ら吾が心之天に知られたるの意識にあらずや。何人か、吾が心之天を敬せざる、何人か、吾が心之天に知らるゝことに至高の満足、窮極の安心を見出でざる。絶對的懷疑白眼の徒は言はず、苟くも嚴肅なる一念を以て人生を觀じ、其の眞摯なる努力を泡沫の夢となさざる限り、何人か暗々の裡、吾が心之天に眞認識、眞評價の知己を求めて、こゝに究竟の安立を托せんとはせざる。自家妍媸、自家知。而して吾が心之天に訴ふる心ぞ是れ取りも直さず神に知らるゝを願ふの心なる。神に知られんと願ふ心は、吾が心之天に知られんと願ふ心と同じ心の根柢より咲出でて、其の一層調べ高く光強く震動煥發せる者にあらずや。自己





籬の日や藏か  
らみやこうつ  
し有り

蟬時雨

初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり、初蟬といはるる

籬の日やあつてみり



横井也育肖像筆蹟

までぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて、油火の代りにせ

といふべし。

螢は、たぐふべきもの

もなく、景物の最上なる

べし。水に飛びかひ、草

にすだく。五月の闇は、

唯、このものの爲にやと

槐安の都を  
淳子、大槐安、國に見  
入り、南柯郡の二見  
守と南柯郡の二見  
り十年を經て、二見  
て夢を醒め、古見  
槐下を尋ね、古見  
と云ふ穴あり、古見  
よれるなり。  
歐陽修、字は  
永叔、宋の人。  
蒼蠅、賦あり。  
長嘯子、木下勝俊。  
魚の作に、紙

利用されたのは、このものの本意にはあらざるべし。

蜘蛛は、巧みに網を結んで、潜まつて物を害せんとす。ひと

へに、奸賊の心ありて、いとにくし。さはいへ、廢宅の荒れたる

軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふる折も

あらんか。

蟻は、明暮にいそがしく、世の營みに隙なき人に似たり。東

西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか、槐安の都を遁れて、そ

の身の安き事を得ん。さるも、たよりあしきかたに、穴を營み

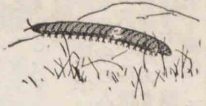
て、千丈の堤を崩すべからず。蠅は、歐陽氏に憎まれ、紙魚は、長

嘯子に憐まる。狗の齒に噛まる、蚤は、たまたまにして、猿の

手にさぐるる、風は、逃る、こと難かるべし。蚰蜒は、梶原と

いへり。さるは、梶原が異名なりや、げぢげぢが異名なりや、先

をさむし



原・吉原  
東郡・吉原は  
同富士郡にあ

漢にすむ  
海土のかる  
にすむ蟲のわ  
れからと音を  
こそなかめ世  
をば根みじ  
(古今集、藤原直子)

後、今は知り難し。

蝸牛の家は持ちたれども行く先々を負ひ歩くは、雲水の安

きには如かず。蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむ

しの數多きは、不用の事なり。

蟻の瘦せたるも、斧を持ちたるほこりより、その心、いかつ

なり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。唯、原吉原を駕籠に

のりて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・響蟲は、その音の似たるを以て名に呼べり。松蟲

の、その木にもよらぬに、いかで、かく名をつけたるならん。毛

生ひ、むくつけき蟲にも、同じ名ありて、松を枯し人にうとまる。

蟋蟀は、つづれさせと鳴きて、人のために夜寒を教へ、藻にす

海軍はたつとるもの

む蟲は、われからと唯、身

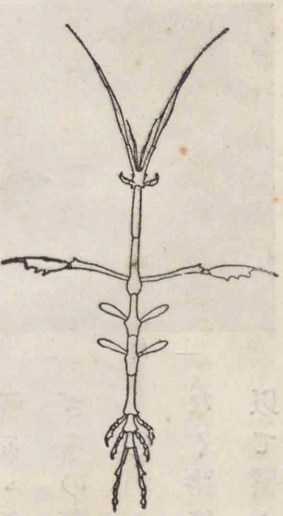
の上を嘆くらんを、養蟲

の父よと呼ぶは、あはれ

深し。されど、父のみこ

ひて、などかは、母を慕は

ら



ざるらん。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき

夕、始めて仄かに聞きたらん。又は、長月の頃、力なく残りたるは、

寂しきかたもあり。藪蚊は、殊にはげしきを、彼の七賢の夜話

には、いかに團扇の隙なかりけん。

(編衣)

七賢  
竹林の七賢、  
嵇康・阮籍、  
山濤・向秀、  
劉伶・阮咸、  
戎・七人、  
のづれも晋の  
人なり。

市島春城  
早稻田大學名譽理事、名は謙吉。

二八 水百態

市島春城

○洋々として際涯を見ず、觸るゝに巖なく、礙ささふるに淵なく、清濁渾然痕なく、獅子の潤歩するごとく、堂々として流るゝ者は、聖人君子に譬ふべし。



○激浪奔放、疾きこと矢の如く、一往千里、石を飛ばし、巖を動かし、鞆たもと滂澎湃たふ觸るゝ者、遮るもの、擊破せずんば已まざるの概あるもの、覇者に譬ふべし。  
○涓々玉の如く、珠の如き細流、規律なく、路傍に縦横するもの、穉子の態を以て譬ふべきか。

鞆

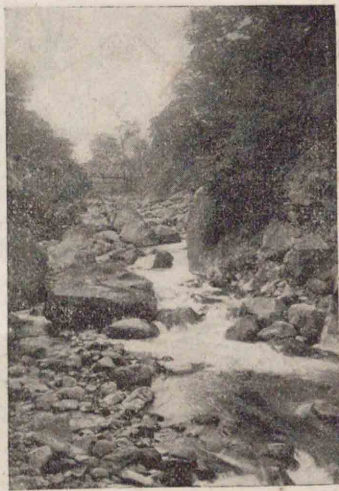
覇者

涓々

穉子

潺湲

○流れ小に水清く、底淺く、石見え、野花亂れ、咲く間を潛り、潺湲として流るゝ者は、處女の態に譬ふべきか。



潺湲

○覆盆の強雨、倏忽到り、倏忽霽る、其の到るや、雷鳴り、電閃き、天地晦冥、咫尺辨ぜず、其の霽るゝや、天日輝き、一空、纖雲を留めず、斯くの如きは、男子的態度、吾儕之を愛す。

○忽ちにして晴、忽ちにして陰、僅かに一晴を得れば、忽ちに一雨來る、之れに譬ふべき人、往々貴族社會に見る。

○細雨濛々、數日に亘りて、霽れず、粉末の水氣、微分の罅隙に竄入し、衣服百物を、濕潤せざれば、已まざる者、所謂梅天の淫霖。

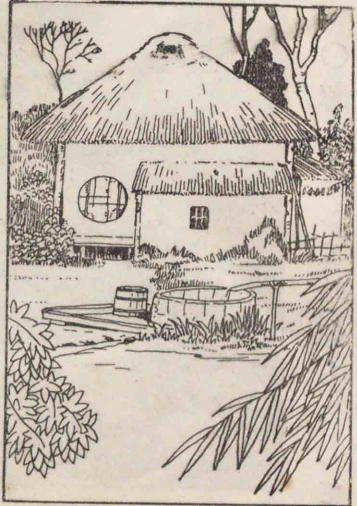
淫霖

富渾  
富贍

何人も忌む所、婦女子の啼泣、これに庶幾し。

○水の渟蓄、渾渥、淵を爲す處、富贍の相あり。

○水枯れ石出で、僅かに剩水を見る、貧窶の相あり。



寛

○古歌に云く「そこひなき  
淵やはさわぐ、山川の浅き瀬  
にこそあだ波は立て、人事に  
譬ふれば通人は多く言はず、  
半可通却つて多く言ふ、恰か  
も空罐を載せて走る車の騒

然たると一般、老子曰く、知者不言、言者不知。

○傾斜ある寛に水の走るを見て、尤も水の急なるを知る。

○草庵寂寞たり、唯だ匆忙を見るものは、寛の水のみ。

○飛瀑一方に懸り、溪流他方に在り、瀑聲の轟々、溪聲の浚々、  
相和して耳を聳せんとす、偶、驟雨至り、沛然として車軸を覆す  
の概あり、此の光景、天地皆水なり。而して人の此の間に在る、  
宛かも潜水器中の人と一般、一種悽愴の感に撃たる、吾、鹽原の  
水郷に於て此の光景を實歷す。

○水の味最も美なるは、夏時峻坂を攀登り、流汗背に滿ち、氣  
喘ぎ喉涸る、時、巖罅の清水を掬ぶの際にあり。詩人曰く、「平  
生於物固無取、消受山中水一杯。」是れ此の間の妙味、車輿道を行  
くもの、解せざる處。

○水ほど旨きものなし、臨終の人多く末期の水をのむ。

○雨は感慨を惹く者、別して夜雨、客中の雨然りとす。故に  
雨は詩人に喜ばる。但だ感慨を惹き易きが故に、神経患者に

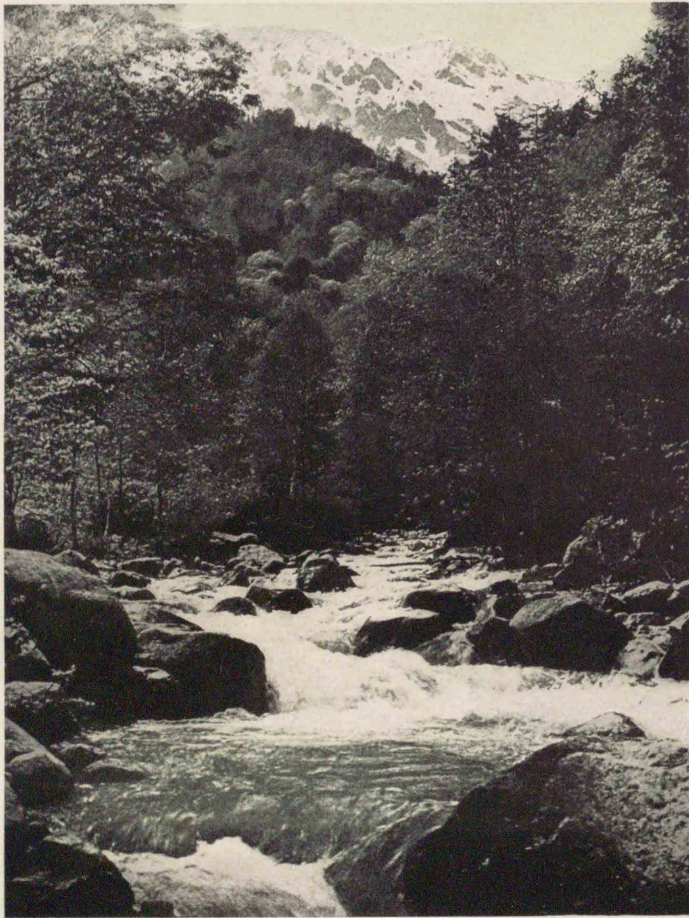
嫌はる。

○野味を帯ぶるもの概して旨し。鹽のごとき、其の精製せるものよりは、多少にがりを存する者却つて味あり。水に於ても、蒸溜水に味なく、山間の水に味あり。要は野味を存するに依る。

亭樹

○水は外物を假りて多く趣をなす。溪流に橋の架する、亭樹の水に臨む、紅燈の水に映ずる、流螢の水面を飛ぶ、小艇の水に泛ぶ、漁夫の網を翻す、兒童の綸を垂る、水禽の水を掠めて飛ぶ、皆水に趣を添ふ。

○影の水に映じて趣味あるもの、曰く帆影、曰く橋影、曰く山影、曰く塔影、曰く花影、曰く月影、曰く燈影、曰く雲影、曰く樓影、曰く鳥影。



黒部の溪谷

3  
山部

歎乃  
ふなうた  
擣衣  
きぬた

浮屠

○聲の水を度りて趣あるもの、曰く漁聲、曰く鐘聲、曰く絃聲、  
曰く歎乃、曰く笛聲、曰く禽聲、曰く擣衣。

○夜雨一過、街上燈光滿地、吾此の光景を愛す。

○夜水は活氣なし、唯だ燈影の落射を得て活氣あり。

○水に横の水あり、豎の水あり、曲線の水あり、横の水は豎の  
水の美なるに若かず、豎の水は曲水の奇なるに如かず。

○横、豎、曲、其の何れにしても規則立ちたるは概して趣を闕  
く。横水の河も石の遮斷を得て始めて趣あり。豎水の瀑布  
も屈折ありて始めて趣あり、曲水も變化なければ趣なし。外  
國人此の理を推して日本美術を味はゞ、眞諦を得るに庶幾か  
らん。

○我が邦の名瀑名水、多く浮屠氏の探檢に依り世にあらは

飲ふ



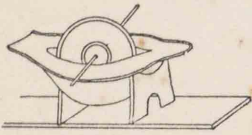
流

る、随つて佛典の語を名とするもの少なからず、又概ね水邊に佛像を置く、幽寂の味は境とよく調和し、崇高の趣を一層深くす。

○村居水景の佳なる者、曰く農夫清流に蔬菜を洗ふ、曰く家鴨水に遊ぶ、曰く雨後澗水岸を呑む、曰く野水盈々、村童牛に飲ふ、曰く村娘甕を提げて柳外に蛙聲を汲む、曰く澗流清うして馬を浴す、曰く農夫雨中蓐を採る、一々擧ぐるに暇あらず。

○雨後風起れば大水來ると云ふ、事實も亦然り。余初め其の故を解せず、後漸く其の解を得たり。蓋し山にあるの樹木

やげん



潭 碧 峽 澗

其の數幾十萬、其の樹木の葉幾億萬、雨の葉を濡して葉上に停留する水量、葉に就いて見れば僅かに數滴に過ぎず。然れども幾億萬葉の上に停留する水量を合すれば、幾十萬斛の大を爲す。而して日光之れを乾かすに違なく、強風一揮すれば、此の幾十萬斛の水は直ちに地上に落下し、或部分は地下に入るべきも、或部分は流れて終に河に投ず。雨後の風、出水の因を爲すは此の故なり。  
○兩厓深く落込み、藥研の如き底に、細く白く水の流るゝを瞰るは趣あり、淙々として地下に聲のみを聞き、水を見ざるは

奥ゆかし。

○郷里近き僻村に、清冽なる岩清水あり。石を以て築きたる尺四方の容器を以て之を受く。水量斗に満たずと雖も、三伏の暑候曾て涸渴を見ず。余、歸省の途次必ず之を過ぎ、一茅店に憩ひ之を掬するを例とす。西行の「とく／＼と落つる岩間のこけ清水、くみほすほどもなきすまひかな」の和歌、吾人ここに於て趣味を感じず。

○釣客船に起臥し、往々數日に渉る、語つて曰く、「漁舟に身を寄せ水上に寝臥して夜を明すものにあらずんば、眞個水上の趣味を解せず、月夜には月夜の趣あり、暗夜には暗夜の趣あり、宇宙幽寂の趣は夜半に於て始めて味はふを得べし」と、又曰く、「睡中物音に驚き、覺むれば大魚舷側に躍り、頭を露はして船に

とく／＼と  
山家集に見當  
らざれど世に  
西行の歌と稱  
せらる。

魚簞

薄る、月光水を帶ぶるの魚頭を照らし、魚眼の閃々と共に一種怪物到るが如き感を起さしむ。」と、其の境に在らざれば實驗しがたき光景なり。

○海に趣を添ふるもの、曰く島嶼、曰く亂嶼、曰く風帆、曰く城樓、曰く燈臺、曰く棧橋、曰く巨鯨。

○板橋趣味なし、霜を帶ぶれば趣味あり。蜘蛛網趣味なし、露を帶ぶれば趣味あり。茅舎趣味なし、雪を戴けば趣味あり。

○微風蕭々の夜、遠く水邊の漁簞を望む、篝火往々地上を離れて見ゆることあり、不思議に似て不思議にあらず、實は水蒸氣の作用に外ならず。

○旋渦は水の曲線の最も美なるもの、其の小なるものは池水に於ても之を見る。小旋渦は愛すべし、其の大なるものは



島嶼水を遮る海中に於て之を見る。大旋渦は壯觀なり、而して觀者悽愴の感に撃たる。

○物の相容れざる、水火音ならずと云ふ、水能く火を滅するを指す。到底火は水に敵する能はず。勢力に於て又分量に於て。況んや、火は水に代用し得ずと雖も、水は火に代用し得るに於てをや。見よ、石炭を用ひたる工業は、今は水力電氣を用ふるにあらずや。石炭盡くるとも憂ふるを要せず、水は無盡藏にして無限の火を作るを得。水能く火を滅し、又能く火を作る、水なる哉、水の勢力洪大無邊。

○水の眞味を解する者、曰く茶人、曰く染織家、曰く醸造家、曰く釣客、曰く游泳家、曰く畫家、曰く厨人、曰く水道吏、而して醫家、藥劑師、化學者に至つては、すべての水を不純潔となし、特に蒸

模楷

溜せざれば使用せず。

○水は革新の好模楷なり、動けば清く、動かざれば腐る。井水のごとき、汲むこと甚しければ益々佳水を得、水は革新を教ふる好師範なり。

○塵埃を避くるの適處は水上に若くなし。故に能代の漆工は海上に船を漕ぎ出して漆を施す、是れ能代産漆器の晃々鏡の如く、纖塵を留めざる所以。

○日本は一大水國なり、周圍には大なる海洋ありて、これより蒸發する水蒸氣は、濛々常に全土を包み、其の山嶽に撞觸するや、凝つて雨雪と成り、散じて河川沼湖となる、水は到る處に滿々たり。

○日本は水力跋扈の國なり、水力跋扈するが故に自然の風景

に富む、風景美に於て世界に超絶するは水力跋扈の賜なり。  
 ○風景美誇るべし、然れども水力跋扈の爲、國家の蒙むる損害果して幾何ぞ。此の大損害は、實に風景美に拂ふの租税なり。

○大水毎に風流の處多く慘害を免れず、即ち懸岸樓を起し、水邊亭を築くの處、皆、打撃を受けて悲惨を極む。怪しむを要せず、遊賞地は多く水の左右管帶區なり、水の游滯跋扈地なり、其の打撃を受くるは當然水に對する貢租と見るの外なし。

○何が故に風景美は水力跋扈の賜と云ふ、蓋し水は大なる自然の美術家なり、渠は營々倦むなく、幾百年幾千年將た幾萬年、殆ど休息なく山を削り、谿を穿ち、河を開くが爲に巨斧を揮ひ、更に雨露霜雪の如き細斧を藉つて密かに彫刻し、奇巖こゝ

透選

に生じ、怪石こゝに起る、或は峭立柱の如く雲に聳つものあり、壁立屏風の如く透選屈折するものあり、或は洞門洞穴を穿ちて人を通ずるあり、或は人形魚形鳥獸形を作るあり、或は仰ぎ或は俯し、或は起ち或は臥し、或は水上に、或は巖上に、而して山に於ては飛瀑を懸け、海に於ては澳灣を削り、人間をして造化の美に驚歎せしむる者、皆水の彫刻作用に外ならず。

○水の技巧を弄する、岩石の質に依つて難易あり。かの石灰岩は、其の質軟、故に水の技巧を施す又容易にして、此の種の巖石に殊に奇工を見る。然れども軟巖の彫刻は巧緻に過ぎ、往々俗に陷るの觀あり。花崗岩に至つては其の質堅硬、之を彫刻すること甚だ容易ならず。水の刀を揮ふに苦心する所の者は是れ、然れども彫刻の結果は奇拔にして雄渾の趣あり。



水百態

雪舟、本名は  
小田等楊、備  
中赤濱の、  
永正八年、  
八十七年歿、

海市  
海邊又は沙漠  
等に於て、水  
蒸氣の作用に  
よる、  
市村の人物の  
馬など、  
はして空中に  
現るもの、  
苺苔  
隨、  
意坐、  
苺苔、  
杜甫詩、

宛かも雪舟一流の畫に對する如く、人をして崇高の念を起さしむ。地理學者は如上の彫刻を浸蝕と云ふ。  
○水は多能なるも、兩極圈内に於て巖石土壤の浸蝕彫鏤して風景美を形づくるの材料無きに窮する時は、自から團結して山嶽を作り島嶼を作る。水は眞に風景の神、如何なる所に於ても風景を美にせざれば満足せず。

○水の技巧を弄する、單に彫刻のみならず、五色の靈筆を弄して彩色を施すに於ても亦妙を極む。試みに水蒸氣の作品を見よ、曰く海市、曰く蜃氣樓、曰く虹橋、曰く紅霞、曰く蒼靄、曰く彩雲、曰く六花、曰く苺苔、一々列擧するに遑あらず。

○古來の傳説に云く、水はあらゆる魔術妖術よりも優るの秘術を有すと、然り、水は自然界の大妖術家なり。而して、此の



山市晴嵐 (大觀筆)

巨匠は日本に於て殊に多く、古來幾んど人の之を牽制するなく、任意に其の手腕を揮はしむ、本邦の名山水に富む、怪しむを要せんや。

○水の大と云ひ小と云ふ、要は比較の語なり。日本の自然山水に比すれば、尺盆の山水は小品なり。大陸の大山大水を以て我が山水を見れば、皆小品にして、恰かも盆中の假山水の如きものあらん。吾、島國に局促し、未だ大陸の大山水を知らず、百水を筆するに小品の水の範圍を脱する能はざるは慙愧に堪へざる所なり。

(春城隨筆)

松本亦太郎  
文學博士  
心理學者  
怡悦  
よろこぶ。

松本亦太郎  
色彩美の觀賞  
自習文  
松本亦太郎

音の感じの世界と並んで、我々の心を怡悦せしむるは、色彩の世界である。而して色彩の世界には、いつも形状がある。自然の色彩と云ふが、我々の心を離れての色彩は、エーテルの波動であつて、我々の享樂するのは、視官の機能を基礎として意識内に生じたる色彩の世界である。自然界に對する時、最も著しく我々の心に訴へる色彩は、空の青色と水の青色とである。青色系の色は、我々の心を沈靜させると共に、血液循環や呼吸運動を靜かにする。景は遠くなるに従ひ、空氣が重疊するから青色を増し、沈靜の心が愈々深くなる。澄める水は、淺ければ帶綠青色で、寧ろ白綠に透き通つて見えるが、海水の如く其の深さを増すに従ひ、紺青となり、凄味を帯びて來る。湖河の水には、鑛物或は植物の溶解するが爲、翡翠の色を表はしてゐる。

郭熙  
宋代の有名な山水畫家、河南の人。  
林泉高致  
山水畫に關する論文集、その子郭若虛の編纂したもので、世界的に稱せられる。

るものもある。水天の色は時により所により種々趣を異にする。宋の郭熙は「林泉高致」に水色は春綠に、夏碧に、秋青く、冬黒し。天色は春晃き、夏蒼く、秋淨く、冬黯しと述べた。是等は要するに、音色の變化の如きもので、水天の主調は青色である。空の見える所、水の流るゝ所、人間の心の苛立ちを平靜に歸らせる働が斷えず行はれてゐる。朝顔紫陽花あやめなど、淡青色の花は、人の心に靜かなる喜びの感じを生ぜしめる。

水天の青色に對比し、人の心を發揚興奮させるのは、地面の黄土色と天體の黄金色とである。日本では雨後でなければ、黄土の濁水は見難いが、揚子江や其の流出する海水は、黄濁に染められて永久に澄む機會はない。黄土代赭の色は、心を苛立たせる。而して此の色が大規模に開展すれば、一種の威壓力があつて、莊嚴の氣象を發揮する。初夏の候、大風黄沙を揚げて、東京の都を覆うた時などの心持は、それ

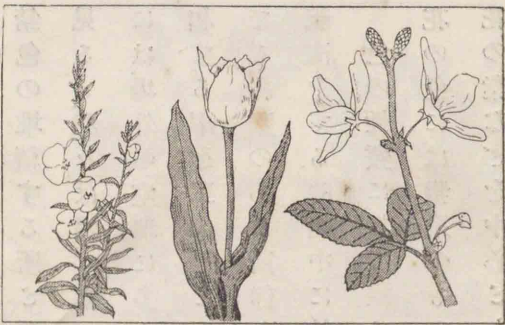
アリゾナ  
(Arizona)  
北米合衆國の  
州名。  
朝暾  
朝日。

である。埃及の沙漠の遠く連なるを見る時は、威壓を感ずると共に、  
神祕の感を催さざるを得ない。アリゾナの沙漠の夕日に輝く興奮  
の気分なども甚だ味がある。天の黄金色を最も壯大に發射するの  
は太陽の光である。印度洋の如き赤道に近い所での朝暾の光景は、  
天地の帝王が地球の舞臺面に出御する様な大袈裟の段取で現はれ  
東方の空は黄金と紅と白の無数の變化を以て彩られ、其の壯觀は言  
語に絶してゐる。吾人の知覺に映する自然の事象中で、赤道附近の  
日の出の如く壯なる光景を表はすものは無い。月や星から反射す  
る太陽の光は弱くなり且大きさが極限される爲、和かい優しい色にな  
る。これは喜悅の色であるが、空氣の爲に青みがかつて來ると共に、  
背後の天空の色との對比が減じて沈思の趣を呈する。天體天象の  
特色たる黄金色は、又地上の花、果、蟲、禽の色となつて、我々の心を興奮  
喜悅せしめる。連翹れんぎょう、黄テューリップ、菜の花、南瓜の花、月見草、黄菊、蜜

インコ



凋落  
しほみおち  
る。



草 月 プツリーユテ うげんれ

柑の實など、春夏秋冬の自然を彩つて我々  
を樂しましめる。黄蝶かカナリヤいんこ、鸚哥いんこなど  
に、美しい黄色を輝かすものがある。  
草木の葉は緑色を中心とし、それが若葉  
の時は、黄色か、紅色の方に近づき、草木の種  
類に依つて青の方に  
傾き、愈々熟すれば暗黒  
を帯び、凋落前には黄  
紅に變ずるものがある。  
る。緑系の色は寒暖相和し、興奮沈靜の情相合  
した趣の深い色で、非情の生命の發現する特色  
であつて、此の色を見れば人間は生命に復活す  
る。日本人は長く草木の葉の色を見ないでは



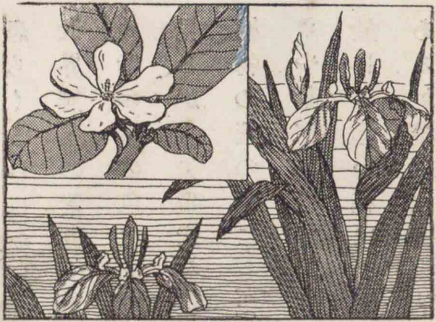
雀 糸 金

融和する。  
和らげる。

みられない。希臘の雅典の都人などは綠色趣味に乏しいが、北歐の民族は綠色趣味に富んでゐて、都會の公園は勿論、市街にも草木の翠綠を繁茂せしむる事に苦心をしてゐる。草木の綠色から隔ると、人の心は俗惡殺伐になる。先年の大震災の爲、東京の下街が到る所、錆色の堆積する所となつた時、偶、家の入口に綠樹の鉢植を置くのを見ると、我々は限りない慰藉と喜悅を感じた。米國の理想的工場には、場外の空地に多くの樹木を植ゑ、芝生を作つて、勞役者の心を融和する事を工夫してゐるものがある。假令鉢植になつてゐるものでも、綠葉のある所即ち自然あるを感じて愉快を感じる。多少長い航海をする時、船中に鉢植の草木を見る程嬉しく思ふ事はない。

色の性質に於て、綠と正反對であるのは、紫系の色である。自然の花の色には、紫系のもものが尠くない。木蓮の花の紫、テューリップの花の紫などを中心として、赤に傾く方に牡丹芍薬、脚躑があり、青に近

コロラド  
(Colorado)  
北米合衆國  
コロラド州よ  
り西南流して  
メキシコ灣に  
入る河。  
グランド・カニ  
オン  
(Grand Cañon)  
ユタ州から  
アリゾナ州へ  
かけての大峽  
谷。



杜若と木蓮

づく方に、藤、杜若、菖蒲などがある。紫系の花は、心を興奮させ、又心を沈静させる。華やかなるが如く、内氣なるが如く、兎に角人の心を悩ます色である。紫系の風景の大規模に開と展してゐるのは、コロラドのグランド・カニオンである。谷の幅は十二三哩、其の長さは二百十七哩あつて、此の大峽谷に奇形の山岳が重疊して連なつてゐる。それを下瞰すると、實に不思議な景色に見える。峽谷中の山岳には樹木などは皆無であつて、其の底にコロラド河が流れてゐる。土の色が一種特別な黄土兼代赭色をしてゐるが、其處に日が當り、而して又空氣の青色がそれに混するので、牡丹色、桔梗色、或は小豆色、藤色等の種々の色が現はれ、重疊せる山岳、谿谷が、紫を主調とする種々なる色に彩られ、實に

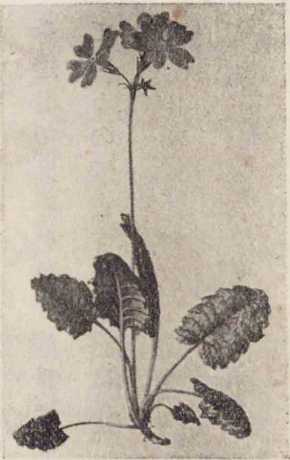
美しく、又人の心を惱ます譬へやうのない景色を眼前に開展させる。恐らくこれは



ド ラ ロ コ

世界無類の紫色山水であらう。

紫の隣の色は赤である。夕やけの如き天象の色は、空氣を透して見るから矢張紫を帯びてゐる。新嘉坡シンガポールなどの如き熱帯の國土には、植物の葉の色にも、花の色にも、鮮なる赤が現はれ、緑と赤の染分けの莖や葉があつて、天真爛漫の華やかさである。日本の如き温帶國に於ける赤い花は、大抵白が混和し、淡紅色に咲く。深紅は餘り興奮的であるが、淡紅は發揚的で喜悅の心持を生ずる。櫻桃、蓮山、茶花、櫻草、



スモスなど日本人の一般に喜ぶ花は何れも淡紅である。南天、青木、萬年青などの如く、草木の實には、眞赤な色があつて、寒い冬の庭を温ならしめる感じがある。

自然に現はれる總ての色彩は、光度が増せば漸次飽和を失つて淡くなり、其の極は遂に白色となる。白は清淨、喜悅の心持を生ずる。白雲、白雪、白砂は人の心を無垢純潔に復歸せしめる。白梅、白牡丹、白蓮、卵の花、白躑躅、白菊等の花は、何れも人の心を淨からしめる。總ての色の光度が減すれば、色は漸次に暗くなつて黑色となる。自然界には色彩の對抗があり、競争があるが、他の色を禁止して全勝を占め、色界を滅却する力を有つてゐるものは暗黒色である。稀薄なる暗黒は憂鬱の氣分があつて、如何なる





る家國の體制は、祖先教の基礎の上に立つ。之を千古に維ぎ、之を萬世に傳ふるは、我が民族の特質にして、我が國體の精華たるなり。

人は、孤立獨存し得べきものにあらず。共同團結以てその生存を全うす。而して、その團結する源由と形體とは、固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持するものは、その團結固からず、又、久しからず。利害の異同は、生存の狀況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束はまた人爲を以て解除せらるゝを免れざればなり。血統相依るは、自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは、社會のはじめにして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは、天賦の團結たり。血脈相通ずるは、天然の連鎖なり。人爲を以て之を絶つこと

家長權  
統治權

を得ず、利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由り、離るべからざるの共同生存を成すものは、血統團體なり。血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に、その團結は永久なり。血族關係は、利害を以て離合斷續するを得ず。故に、その團結は鞏固なり。而して、之を統一するものは、祖先の威力なり。子孫の祖先の威力に服従するは、對等の約束ならざれば、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては、天皇は太祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは、共に君父がその祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護する權力なり。吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、

靈位

遺傳したるの餘慶なり。何が故に、血統相近きもの相依りて家をなし、民族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、その威力と慈愛との下に生存の保護を全うせんと欲するの天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、その慈愛なる保護の権力に従順なる至情は、延いて、これをその父母の父母に及すべし。吾人の祖先は、即ち、畏くも、我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先たり。天皇は現世に在る天祖たり。父母に孝なるべき所以は、即ち皇室に忠なるべき所以にして、之を一貫するの國教は、即ち祖先の崇拜なり。この大義は、吾

絶對の理法

顯界  
幽界

人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持するの軌道たるものなり。  
人は、信仰によりて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を總合して、之をその根柢の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は、肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又、子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に於て、その肉體を喪ふも、尙幽界に在りてその子孫を保護することを確信したり。これ祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所以なり。我が固有の國體、民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む處、國は天祖の威靈の住む處にして、祖先の威靈は國家を防護す、吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生

命の延長なり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とは國家の觀念に於て同化し、その繁榮にして永久なる存在を全うするの大義ここに存す、祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先がその子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、すべて皆我が同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從するの道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體は之によりてその基礎を立て、國民の道徳は之によりて深厚を加ふ。萬世に亙りて、この國この民を保持するものは、この國體の精

華たる我が固有の祖先教の力なり。

(愛國心)

昭和四年三月二日  
文 部 省 檢 定 濟

刷 印 日 五 月 十 年 參 和 昭  
行 發 日 十 月 十 年 參 和 昭  
刷 印 版 再 正 訂 日 五 廿 月 二 年 四 和 昭  
行 發 版 再 正 訂 日 八 廿 月 二 年 四 和 昭

發 賣 所

東 京 市 神 田 區  
今 川 小 路 二 丁 十 一

振 替 所  
東 京 八 八 一 五 番

金 港 堂 書 籍 株 式 會 社  
金 港 堂 書 籍 株 式 會 社

中 國 等 文

昭和四年臨時定價				
卷九	卷六	卷五	卷四	卷三
卷十	卷八	卷七	卷二	卷一
金七拾五錢	金六拾參錢	金六拾五錢	金七拾八錢	金八拾壹錢

〔册 十 全〕



價 定				
卷九	卷六	卷五	卷四	卷三
卷十	卷八	卷七	卷二	卷一
金四拾五錢	金參拾八錢	金參拾九錢	金四拾七錢	金四拾九錢

印 刷 所 電 新 堂

代 表 者 原 安 三 郎

發 行 者 兼 刷 者 金 港 堂 書 籍 株 式 會 社

東 京 市 神 田 區 今 川 小 路 二 丁 目 十 一 番 地

著 者 藤 井 乙 男

昭和五年臨時定價 金六拾四錢

差四  
計 九 〇 二 七  
九 〇 二 七  
五 八 〇 一 〇 二 六 六

12  
210  
10  
299  
299  
299  
66  
140  
10  
258  
130  
988  
55  
20  
20  
10  
11  
900  
500  
200

中 等 國 文 卷 八 終

格 中 發 行 部 印

格 中 發 行 部 印



中 等 國 文 卷 八

六

